

371
R76
2. (1)

岩波文庫

432

エミール

第一篇

ルソオ著
平林初之輔譯

岩波書店



始



371 F53
R76-
(1)



岩波文庫

432

エミール

第一篇

ルソオ著
平林初之輔譯



岩波書店



本譯書の改訂について

ていつに訂改の書譯本

本書ははじめ大正十三年に春秋社から出版され、その後、同社の世界大思想全集の一冊として出版され、更に最近同社から廉價版として出版された「エミール」の改訂版である。本書の翻譯が全部できあがつたのは大正十二年の夏で、ちやうど印刷にかゝつてゐた最中に、關東大震災にあつて、當時横濱の私の家にあつた原稿の少なからぬ部分は、烏有に歸してしまつた。しかも當時病氣と多忙のため私は短時日の間に失くなつた部分の原稿を補足することができなかつたので、春秋社の諒解を得て、友人柳田泉氏を煩はして、その部分をすつかり補譯して貰ふと同時に、他の人に手傳つて貰つた後半部には同氏に全部目を通して貰つた。この厄介な仕事をひき受けて、比較的短時日のうちに、私たちの多少満足し得る譯書を上梓し得る運びに至つたのは、全く柳田氏の努力の賜物であつた。そして舊譯書に附けられてゐる序文も亦全く同氏の執筆によつてでき上つたのであつた。

しかし凡ての翻譯の場合にさうであるやうに、この翻譯も數年の時日を経てから讀み返して見ると、隨所に不滿を發見せざるを得なかつた。就中、別々の譯者の筆で書いたための、全體の文章上の統一が十分でないことは争へなかつた。私は、一、二年前から、その改譯の餘裕と機會とを得ることを望んでゐたのであつたが、幸ひ、岩波書店からこれを本文庫の一部に加へることを勸告されたので、春秋社及び柳田泉氏の諒解を得て、約一年前に、改譯に着手し、やつとその第一篇を上梓する運びに至つたのである。本書は全部五篇よりなるのであるが、今回は一篇づゝ分

冊として上梓することにした。さうすることは本文庫發刊の主旨にもそふだらうと考へたからである。第二篇以下は今後一、二箇月の間隔をおいてひきつゞき出版される豫定である。譯者はこの改訂版を出すにあつて最初の頁から最後の頁まで周到に眼を通して到るところに添削を施したが、特に第二篇の後半以後は、殆んど改譯と言つてもよい程に朱を加へた。これによりて多少とも舊譯よりも原書の趣きを忠實に傳へ、且つ邦文として讀みやすくなつたとすれば、譯者の満足これに越すものはない。

この改訂にあつては、私は専らフランスの原文のみにより、他國語の翻譯書を參考することゝを殆んど避けた。それは私の知る國語の中には、不思議にも「エミイル」の完全な翻譯が見當らなかつたためと、本書のやうな獨自主著書は、たゞ原文のみが作者の眞意を誤りなく傳へ得るものであることを信じたためとである。しかし周到な改訂にも拘らず、譯者の語學の未熟のために、意外の誤譯なきことを保障するわけにはゆかない。本書の如き、世界的に有名な著述の翻譯は、なるべく完全を期するのが至當であると思ふから、讀者からお氣附きの誤りを指摘されることは譯者の此の上もなく歡迎するところである。

最後に本書の改訂版の出版を快諾された春秋社及び舊版の共譯者柳田泉氏の好意に對して感謝の微意を捧げたいと思ふ。

譯者しるす

譯者序

「エミイル」は一七六二年、ジャン・ジャック・ルソオが、モン・ルイに寓居してゐた頃公けにされた。この頃はジャン・ジャックの一代を通じて最も多産な時代で、「新エロイズ」「民約論」等の名著はひきつゞきこの二三年間に出版されたのであつた。

「エミイル」の出版はジャン・ジャックの生涯に大きな轉機を劃した。この當時は、フランスでは宗教や政治に關して、少しでも自由な見解を發表しようと思へば、非常な迫害を覺悟しなければならなかつたので、當時の進歩的思想家であつたヴォルテールでも、デドロオでも、すべて自作を公けにする際は、自分がその作者であることを官權に對して否認してゐたのであつた。若しどうしても自分の署名をして公然と發表しようと思へば、フランス以外の國の書肆から出版するより外はなかつたのである。

そこで、ジャン・ジャックは「エミイル」をオランダで出版するつもりでゐたのであるが、何しろ、その頃「新エロイズ」によりてまきおこされた彼の文名は素晴らしい勢であつたので、その頃彼のバトロロンでもあり友人でもあつたりユクサンブル夫妻及びマレルブの勧めによつて、フランス版も同時に出版することにした。

迫害は豫想通りやつて來た。パリの高等法院(バルマン)は「エミイル」を押收して、その燒却を命じ、著者ジャン・ジャックに對して逮捕令を出した。この報道は此の年の六月二日ルソオの許へ達したので、彼はリュクサンブル夫人のすゝめに従つて、翌日ひそかにモン・ルイを脱走し

て、故國スイスに落ちのびたのであつた。しかしバリ高等法院の逮捕令は、ヨオロッパの全土にひろがつてゐたので、彼はどこへ行つても安住の地を見出し得ず、爾後ヨオロッパの各地を轉々として漂浪しつゞけたのであつた。

ジャン・ジャックの個人の生涯に、かやうな轉機を齎らした「エミール」は同時に人類の思想史上にも一大轉機をもたらした。本書が出版された直後にフランスで出版された教育に關する著書は、それ以前の六十年間に出版された教育書の數の二倍に上つたと言はれてゐる。そしてその大部分は實に「エミール」の模倣、論駁、修正等であつたのである。この書物が如何に當時の社會に深大な輿論をまきおこしたかはこの一事によつても推知できるであらう。

「エミール」の中心思想は、ルソオの他の著書にも共通してゐるところの彼の根本思想、即ち自然崇拜の思想である。

「造物主の手を出るときは人間は善であるが人間の手に移されると悪くされてしまふ」といふ本書劈頭の文句こそは、本書の全篇をつらぬく中心思想である。一切の惡は人間の自然性に胚胎してゐるのではなくて、悉く社會をその源泉としてゐると考へる以上、彼の教育法は、兒童を自然のままに、自由に成長させ、自然の發達に従つて彼自身に學ばせることが原則となつてゐる。即ち人間がなるべく教育を加へないといふのが彼の教育法の眼目である。たゞ教師が必要であるのは、社會の習慣、偏見が兒童の自然な發達を損ふのを防いでやるためである。即ち教育の必要は、彼にとつて、全く消極的なものである。

「エミール」に説かれてゐるところは、實際教育に於ては、到底文字どほりに行はれるものではない。既に、教育の第一歩からして、彼は到底現實には求めることのできないやうな條件を附

してゐる。しかしこの點で「エミール」を批難することは間違つてゐる。彼は自分でもことわつてゐるやうに、エミールといふ理想的な子供を假定し、それを教育する教師が、あらゆる必要な條件を備へてゐるものとして、その上に独自の教育法を展開させてゐるのである。これは實際教育に於ては到底望みがたい條件である。本書の價值は、實際教育の指針たることにあるのではなくて、教育の根本原則を説明したところに存するのである。

「エミール」に述べられてゐる教育法は、悉くルソオの獨創に出でたものとは言ひがたい。先驅者がなかつたわけではない。たとへばモンテーニュ、ラブレイ、フェヌロン、アベ・ド・サン・ピエール、特にロツクの著書はルソオに最も強い影響を與へたと言はれてゐる。だが、それにもかゝらず、ルソオの思想史上、若しくは教育史上に於ける地位は決して滅殺されはしない。自然中心の思想は、多くの先驅者をもつてゐたとは言へ、此の思想はルソオの生き／＼とした力強い表現によつて、全く独自の面目を發揮してゐる。

ルソオ以後の教育學者にして多かれ少なかれ彼の影響を蒙らなかつたものはないと言つてよい。カント、バゼドウ、ベスタロッチ、ヘルバルト、フレエベル、ネッケル夫人等はその最も顯著なものであるが、今日でも苟くも教育を口にし筆にし、又これを實行する者にして、ルソオの唱へた大原則に一度び耳を傾けないものはないと言つてよいであらう。教育學史上に於けるルソオの足跡は今日でも依然として最も著大である。

だが「エミール」の影響はひとり教育界のみに限られてはゐなかつた。彼が、自然を讚美し、田園農村を讚美し簡易素朴な生活を讚美して、一切の虚飾を排し、都會は墮落の淵であると絶叫するや、十八世紀末の爛熟しきつた文明の中に陶醉してゐた、フランスの上流社會は愕然として

驚いた。皇妃マリイ・アントワネットは、プチ・トリアノン宮を百姓小屋に模し、ルイ十六世は銀
治屋の眞似事をしたといふ程である。ヴォルテールは「ルソオの書物を讀むと四つん這ひになつ
て歩きたくなつて来る」と彼一流の皮肉を浴せた。實際「エミール」に説かれてゐる自然崇拜の
思想は當時の社會全般にも深刻な影響を與へたのであつた。彼の思想は十八世紀を十九世紀へ轉
向せしめる契機であつた。

それだけにはとどまらない。近代文化の各方面の大思想家にして「エミール」を愛讀し、その
感化を受けなかつたものも稀である。ケエニヒスベルヒの哲人カントが、エミールに讀み耽つて、
彼の規則正しい日課としてゐた午後の散歩を一度休んだといふことは有名な逸話となつてゐる。
ダイクトル・ユゴオの大作「レ・ミゼラブル」の中に出て来る高僧ミリエル大僧正は、「エミール」
第四編に出て来るサヴァアの司祭の複製に外ならない。

「エミール」は別名「教育論」となつてゐる。實際それは、教育の根本原理を明かにせんとし
た論文である。けれども、ルソオは、その論文が、空理空論に流れることを避けるために、エミ
ールといふ假想的人物を設け、彼自らその教師となつて、この假想の子供が生長するにつれてこ
れに教育を加へてゆくといふ方法をとつた。そのために本書は多分に物語的要素をもつてゐて、
一篇二篇を讀めば先を讀まずにはゐられなくなる。

その構想は、全體が五篇に分れてゐて、第一篇は生れてから、否生れる以前から五歳まで、第
二篇は五歳から十二歳まで、第三篇は十二歳から十五歳まで、第四篇は十五歳から二十歳までの
時期の教育を取り扱ひ、第五篇は、ソフィー若しくは婦女の教育を取り扱つてゐる。この四つの
期間によつて、教育の方法は全然異つて来るのである。たとへば幼年期に於ては肉體の教育、少

年期に於ては知識の教育、青年期に於ては感情の教育を専らとせねばならぬ如くである。たゞ凡
てに於て一貫してゐるのは、子供を主とし、一切の束縛強制を排して子供自身の自然の發育にま
かせるといふ消極的教育の原則だけである。

「吾々は子供といふものを知らないのである。」とルソオは繰り返して言ふ。子供を教育するた
めには先づ第一に子供を知らねばならぬ。自然は人が、人間になる前に先づ子供であることを欲
する。子供と大人とはまるで異つてゐるのだから、子供の教育は子供の立場にたつて、子供にで
きるだけのことをさせることに限らねばならぬ。子供の能力を越えた教育は凡べて無益であるの
みならず子供にとつて有害であると彼は考へるのである。これはルソオの教育説に於て最も重要
な部分であつて、彼が「エミール」に對する批難に對して答へた「パリ司祭ボオモンへの手紙」
の中にもこのことは繰り返してのべてある。それが本書に於て子供の發育に應じて教育を四期に
分つてゐる所以である。

今日「エミール」の個々の缺點を拾ひあげることが容易である。「エミール」に説かれてゐる
原理には謬つてゐるものが多々あるであらう。だが人間の手によつて書かれた教育に關する書物
のうちで、「エミール」程その影響が廣汎にして且つ深刻であり、しかも現在に於ても尙ほ滾々と
して盡きざる生命をもつてゐる書物が他にあらうか？

昭和三年十月四日

小石川水道端にて

譯

著

原著者序

順序も無く、殆んど脈絡さへも無く、考へたことと見たこととを書き綴つた此の文章は、思慮深い一人の善き母(註)を慰める爲めに書き初めたものである。はじめ私は數頁の心おほえを書き留めて置く位なつもりだったのであるが、つい題材に釣り込まれて、此の心おほえは、知らぬ間に一種の著述のやうなものになつて了つた。疑ひもなく此の書物はその内容の貧弱なのに比べると大き過ぎる。併し此の書物に取扱つてある題材が大きな問題であるのに比べると寧ろまだ小さ過ぎるのである。私はこれを公けにするに就いては長い間躊躇した。そして、これを書いてゐる中にも、屢々、此のやうな幾つかの小冊子を書いたのでは、纏つた一巻の書物とするには不十分だといふことを感じさせられた。だが、何とかしてもつと完全なものにしようと思ふに努力した揚句、私は、これは原の儘で發表するに如かずと考へた。それは、一般公衆の注意を此の方面に向けることが大切なのであつて、假令私の考へが間違つてゐるにしても、これがよすがとなつて他の人が立派な考へを抱いてくれるやうにさへなれば、私は全然時間を空費したことにはならぬだらうと判断したからである。世の中から隠遁してゐながら、讀めてくれる人も無く、辯護して呉れる味方もなく、世人がそれに就いてどう考へるか、どう言ふかといふことさへも知らずに、公衆の中へその著書を投げ出す人は、たとひその人の説が誤つてゐても、その誤りが碌々吟味もされずに承認されはしないかと心配する必要だけはない。

(註) シェノンソオ夫人。

私は善良な教育が必要であるといふことに就いては餘り喋々すまい。又現在行はれてゐる教育が間違つてゐることをも今更くどくどく証明はすまい。そのことは多數の人達が私よりも前にしてしまつてゐる。それで私は誰もかもが知りぬいてゐる事柄で一冊の書物を埋めたくはない。私は唯だ、ずつと昔からこのかた、既に行はれてゐる教育に對しては常に反對の叫びのみがあつたけれども、より善き教育はかつて何人からも提唱されなかつたことを指摘するに止めよう。現代の文學と學術とは著しく建設よりも破壊に傾いてゐる。人々は大家の調子をもつて批難するが何事かを提唱する爲めには、もつと異つた調子をもつてせねばならぬ、徒らに哲學的倨傲心の満足を貪らんとするやうな調子をもつてはいけぬ。社會公衆の利益のみを目的とすると言はれてゐる書物は、汗牛充棟も當ならぬ程あるけれども、一切の利益の中で第一に位する所の人間を造る術は尙ほ依然として閑却されてゐる。私の取り扱つた題材は、ロックの著書(註)以來何人も手をつけなかつた問題である。そして私は私以後も亦この問題が閑却されてしまひはしないかといふことを非常に惧れてゐる。

(註) 『兒童教育の考察』一七二一年。

一體吾々は子供といふものを少しも理解してゐない。吾々が子供について現在のやうに誤つた考へを抱いてゐる限りは、進めば進むだけ迷ふのみだ。最も賢明な人達でも大人が學ぶべきことばかり考へてゐて、子供といふものはどんなことを學ぶことの出来る状態にあるかといふことを考へない。彼等は常に子供のうちに大人を求めてゐて、大人になる前に子供がどんなものであつたかを考へない。私が最も全力を傾けたのは此の點の研究である。それは、たとひ私の教育法が全部空想であり誤謬であるにしても、私の觀察した事實は讀者が何時までも參考することが出来

るやうにとの老婆心からである。何うしなければならぬかといふことに就いては、私の観察は非常に間違つてゐるかも知れない、けれどもその何うしなければならぬものが何者であるかについては、私は観察を誤らなかつたと信じてゐる。だから諸君は先づ第一にもつともつとよく教へ子を研究するがよい。確かに諸君は子供に就いて全然無知識なのだから。若し諸君が此のことを念頭に置いて此の書物を讀まれたなら、此の書物は諸君に對して全然無益といふことはなからうと私は信ずる。

さて此の書物の系統的部分とも稱せらるべきものについていへば、それはこゝではたゞ自然の歩みに過ぎないのだが、これが最も讀者を困迷させるだらう。又此の點に就いて、私は疑ひもなく攻撃を受けるだらう、そしてそれは恐らく攻撃する人が正しいだらう。讀者はこの書物を讀むに方つて教育論を讀むといふよりも寧ろ教育に關する空想家の贅語を讀むやうな氣がするだらう。併し、それは仕方がない。私は他人の意見を書いてゐるのではなくて、私自身の意見を書いてゐるのだから。私の見かたは他の人の見かたとは異つてゐる、その點で私は長い間、批難されて來た。けれど私に他人の眼を與へ、他人の意見を與へることが私の力で一體出来るだらうか？ それは出來ない。私に出来る事は私の意見に決して満足しないことだ。私の意見のみが世界中で最も優れたものだとして自惚れないことだ。私に出来ることは私の意見を變へることではない、私の意見を過信しないことだ。これが私の爲し得ること、而して爲したことの全部である。時として私が斷定的の語調をとることがあつても、それは讀者に私の信ずる所を強ゆる爲めではなく、私の考へたまゝを讀者に語る爲めである。私自身が少しも疑つてゐないことを、どうして疑問の形で言ふことが出来るか？ 私は私の心の中に浮んだまゝを正確に言ふのだ。

私は、私の意見を自由に發表するとき、それを權威あるものと認めさせようといふ考へなど微塵もないので、常にその意見に對する私の論據を附して、讀者の批判考量に訴へることにした。併しながら、私は決して私の意見を固執辯護せんとするものではないけれども、それだからとてこれを主張する義務が輕減したと考へるものではない。何となれば私は根本の原理に就いて他の人と異つた意見をもつてゐるのであつて、これは決して輕々に附すべきものではないからだ。それは何うしてもその眞偽が確かめられねばならぬ問題であり、人類の幸福と不幸とを左右する問題だからである。

實行することのできる意見を唱へよ、とさう私は間斷なく繰り返し聞かされてゐる。それは程度、これまでに誰かのやつたことを主張せよと言つて聞かされるやうなものである。或は少くも現存の惡と結びついてゐる何等かの善を主張せよと言つて聞かされるやうなものである。ところがこんな計畫は、或る問題に於ては私の主張よりも遙かに空想的である。何となればこんな混合状態に於ては、善は悪くなる一方だし惡は一向よくなるからである。私は中途半端な改良で甘んずる位なら、寧ろ既存の一切の制度習慣をそのまま遵奉してゆきたい。その方が人間には一層矛盾が少いだらう、人間は同時に相反せる二つの目標に向つて進むことは出來ないのである。世の父母達よ、諸君が實行することのできることを言ふのは、つまり諸君が實行しようと思つてゐることなのだ。私は諸君の意志に應じなければならぬだらうか？

凡そ一切の計畫には二つの注意すべき事項がある。第一はその計畫が絶對的に善であるといふことであり、第二はその實行の容易であるといふことである。

第一に就いては、此の計畫の善なるものが、事物の本性のうちにあるにありさへすればその計畫はそ

れ自身に於て承認されてもよく、且つ實行されてもよい。例へば、今の場合は、提唱された教育法が人間にふさはしきものであり、且つ人間の心情にびつたり適應してをれば充分である。

第二の注意事項は、場合々々の事情によつて異なる。而してその事情は事物に附随する偶然的事情で、従つて、必然的なものでなく、種々雑多に變り得るものである。故に、或る教育はスイスに於いては實施することが出来るがフランスに於いては實施することが出来ず、又或る教育は平民に適し、他の教育は貴族に適するといふ風である。實行の難易は無数の事情によつて變る。而してこの事情は個々の國、個々の境遇にそれぞれ特殊の方法を應用して見るより外に到底限定し得るものではない。併し、此の特殊の應用は、私の題材では左程大切なものではないから、私の計畫には入れない。これは別の人がやらうと思ふ意志があれば、それぞれ自分の志さす國土に應じて、研究することが出来るだらう。私には唯だ、人間が生れる處では、到る處で、私の主張した意見によつて人間が教育され、且つ私の意見によつて教育されることが、彼等自身の爲めにも、他の人の爲めにも最も良いといふことだけで十分である。若し私が此の約束を遂行しないときは、疑ひもなく私の罪だ。併しながら、若し私が此の約束を遂行してゐるに拘らず、それ以上のものを私から望む人があるなら、それは望む人の間違ひだ。何となれば私はそれだけしか約束してをらぬのだから。



エ
ミ
イ
ル

ジャン・ジャック・ルソオ著
平林初之輔譯

第一 篇

造物主の手を出る時は凡ての物が善であるが、人間の手に移されると凡ての物が悪くなつてしまふ。人間は或る土地に他の土地の産物を生じさせようと強ひたり、或る樹に他の樹の實を結ばせようと強ひたりする。氣候も、風土も、季節もごちやごちやにしてしまふ。人間はその飼犬や、馬や、奴隷を不具者にしてしまふ。人間は一切のものを顛倒し、一切のものを不具にして置いて、その畸形を喜んでゐるのである。おぼけを愛してゐるのである。人間は何一つ自然が造つたまふにして置かうとは欲しない、人間をさへも自然のまゝにはして置かない。人間は別の人間の役に立つ爲めに乗馬か何かのやうに仕込まなければならぬのである、庭木か何かのやうに他の人間の好むまゝに勝手放題に歪められねばならぬのである。

而かも尙ほさうしなければ、萬事がつともつと悪くなつて、人類は今の半分も完全にならなうだらう。今日の有様の下にあつては、生れてから獨りで他人の中に放任して置かれた人は、誰よりも最もひどい不具者になるだらう。吾々は、種々の偏見や權威や必要や模範や並びに吾々がその中へ投げこまれてゐる凡ゆる社會制度などのために、吾々の有つてゐる自然性を壓し殺されて、自然のまゝの姿を何一つ残さなくなるのである。丁度それは偶然の手によつて道の眞ん中に生えた矮樹が、通行人に入方から衝きあたられ、前後左右へねぢ枉げられて、やがて枯れてしまふやうなものである。

慈愛に富んだ、思慮深き母よ、(註二)大道より遠ざかつて、人間の種々雑多な意見でこづき廻さ

れないやうに發育期の幼樹を保護することを知つてゐる母よ、私は貴女に訴へる！ 枯れないやうに此の若樹に手入をして水をおやりなさい、この若樹が結ぶ果實は他日貴女の無上の寶となるだらう。貴女の幼児の心の周圍に、遅れないやうに塙を結ひなさい。塙の見取圖をこしらへることは他の人にも出来るが、實際塙を造ることは貴女の義務だ。(註二)

(註一) 子供の初期の教育は最も重要なものである。而してこれが女のすべきものだといふことは疑ふべからざることである。若し自然を造つた神がこれを男にさせようと考へたのなら、神は幼児を哺育する爲めの乳を男に與へた筈である。それ故に教育論は取りわけ女に向つて語るやうにするがよい。何となれば女は男よりも一層子供の近くゐてこれを監視し、子供に一層多くの感化を與へるばかりでなく、その教育が成功すれば女は非常な利益を受けるからである。寡婦の大部分は殆んどその子女の厄介になつてゐるではないか。そして善にまねたれば、彼の女達が子供に與へた教育の効果を、子供等はしみじみと彼の女達に感じさせるのである。法律は平和を目的として、徳を目的としてゐるものでないから、常に財源の處理にのみ没頭してゐて人間といふものを殆んど顧みない。従つて法律は母親に十分な權利を與へてゐない。然るに母親の地位は父親のそれよりも一層偉大であり、母親の義務は一層偉大が折れ、母親の心掛は家庭の幸福を左右すること一層大である。又概して母親の方が子供に對して一層多くの愛着をもつてゐる。子供が父親に對して尊敬を缺いてゐても、或る場合には宥すことが出来る場合があるが、彼を懐に抱いて育て、その乳で彼を養ひ、長い年月の間自分のことも忘れて彼の世話を焼いて來た母親に對して尊敬を失ふ程この子供が墮落してゐる場合には、かゝる淺ましい子供は目を見るに價しない怪物として早速息の根を止めて然るべきである。母親は子供を甘やかすと書はれてゐる。此の點に於いては、疑ひもなく母親が悪い。併し、それは諸君のやうに子供を墮落させるのよりは悪くない。母親は子供が幸福であることとをのぞむのだ、今すぐに幸福であることをねがふのだ。此の點に於いては、母親は正しい。若し母親のやう方が誤つてゐる時はその誤りを明かにしてやらねばならぬ。父親の野心、貪慾、專横、偏見、その無頓着と冷淡とは母親の盲目的な愛よりも子供に對して百倍も有害だ。尙ほ、私が此の母といふ名に如何なる意味を與へてゐるかを説明せねばならぬがそれはすぐ後に書くことにする。

(註二) フォルメイ氏は私がこゝで言つてゐるのは私の母親のことであると信じてゐて、或る著書の中でそのことを書い

てみると私に告げた人がある。これはフオルメイ氏を非常に侮辱したものだ、でなければ私を侮辱したものだ。

植物は栽培によつて生育し、人間は教育によつて人となる。若し人が生れながらにして大きく且つ強かつたとしても、その體軀やその體力は、その使ひ方が分かるまでは毫しも役に立たないであらう。それ等は子供にとつて有害なものになるだらう、何となれば他人が彼を助けようと思はなくなるからだ。(註三)そしてこんな子供は獨りでうつつちやつて置かれて、何が欲しいのかわからぬ前に、窮乏の爲めに死んでしまふだらう。人々は子供の状態を憐んでゐる、だが人間が先づ最初子供でなかつたら人類は滅亡してゐたであらうといふことには氣が附かない。

(註三) こんな子供は外観は大人に似てゐるが、而かも言葉も言葉が表す思想ももつてゐないから、大人の助けが必要であるといふことを大人に知らせることが出来ないだらう。又一寸見たところでは彼が窮乏を感じてゐるといふことは大人には少しもわからない。

吾々は生れながらにして弱い、吾々には力が必要だ。吾々は生れながらにして何物もたない、吾々には助けが必要だ。吾々は生れながらにして無知である、吾々には判断が必要だ。吾々が生れた時にはもたないで、成長するにつれて必要となる一切のものを、吾々は教育によつて與へられるのである。

此の教育は自然、或は人間又は事物から與へられる。吾々の機能や器官の内部的發育は自然の教育である。此の發育を如何に用ふべきかを教へるのは人間の教育である。而して吾々を刺戟する周囲の事物に就いて吾々が自ら經驗を獲得するのは事物の教育である。

かくの如く吾々は皆三種の教師によつて造られる。此の三種の教師の與へる相異つた教訓が互に矛盾してゐる生徒は悪く教育された生徒で、決して圓滿な人とはならない。これに反し、此の

三種の教師の教訓が凡て一致し、同一の目的に集中してゐる生徒のみは、自己の目的に向つて進み、圓滿な生活を送ることが出来る。かくの如き人のみが良く教育された生徒である。

ところでこれ等の異つた三つの教育の中で、自然の教育は吾々の如何ともすることのできぬものである。事物の教育は或る點に於いてのみしか吾々の力で左右することは出来ない。人間の教育こそは吾々が眞に左右することの出来る唯一のものである。とは言へ、これとても尙ほ假定的にさうであるに過ぎない。何となれば一人の子供の周囲をとりまいてゐる一切の人々の談話と行爲とをすつかり指導してゆくことが誰に出来るようか？

そこで教育を一の技術であるとする、それは殆んど成功する見込のない技術である。何故かといふにこれが成功するに必要な三つの教育の一致といふことは人間業ではどうすることも出来ないからである。十分な努力を以つてして吾々に出来ることの凡ては、せいぜい目的に多少とも近附くことだけであつて、これに到達する否とは一に運次第だ。

然らば此の目的とは何であるか。それは自然の目的そのものである。そのことは今證明したばかりだ。教育の完成には前記三つの教育が一致することが必要であるから、吾々の力では何うすることも出来ない自然の教育の方へ、他の二つの教育を導いて行かねばならぬのである。併し、此の自然といふ言葉の意味は一體あまりに漠然としてゐるから、こゝでその意味を限定して置く必要がある。

自然性とは習性アビチユットに他ならぬといふ人がある。(註四)それはどういふ意味だらうか？ 強制的につくられた習性でありながらしかもなほ自然性をこゝろさない習性は一體無いものだらうか、否な、さういふ習性が有る。例へば、垂直に伸びんとする傾向を強制的に歪められてゐる植物の習性が

それである。こんな植物は自由にされても強ひられたまゝの偏向を保つてゐる。併し養液は決してその爲めに最初の方向を變へないのであつて、若し此の植物が成長を續けてゆく時には、再び垂直の方向に伸びてゆくのである。人間の性癖もこれと同じである。同一の境遇に止まつてゐる間は、人々は習性から生じた甚だ不自然な傾向を保存してゐることが出来るが、境遇が變化するや否や、此の習性は止んで自然性が復活して来る。教育は慥かに一の習性に過ぎない。然るに、一方には彼等の教育を忘失してゐる人達があり、他方には又それを保存してゐる人達があるではないか？ 此の相違は一體何處から来るのだらうか？ 若し自然性といふ名稱を自然に一致した習性であると限定すれば、吾々はこんな馬鹿げた問題に煩はされないでもすむ。

(註四) フォルメイ氏はそんなことは誰も書つてをらぬと斷言する。併し私は其の時にはそのことがはつきり言つてあるやうに思ふから、此の詩をあげて氏に對する回答に代へる。

La nature, crois-moi, n'est rien que l'habitude.

(自然とは習性以外の何物でもないと余は思ふ)

フォルメイ氏は仲間の人間を自惚れさせまいとして控へ目に彼自身の腦力の限度を人類の理解力の限界とされてゐるのだ。吾々は生れながらにして感性をもつてゐる。だから吾々は生れるとすぐから周圍の事物から様な刺激を受ける。吾々が吾々の感覺を、言はゞ意識するや否や、吾々は、感覺を生じさせる物の中で、或る物を追求し或る物を避けるやうになる。最初は吾々に快感を與へるものを追求し、不快なものを避ける。次に吾々に適したものを追求し、適しないものを避ける。而して最後には、理性が吾々に與へる幸福乃至完全といふ觀念に照して、此等のものを判斷し、此の判斷に基いて或る物を追求し、或る物を避けるやうになる。此の傾向は、吾々の感性が發達し、理解力が發達

するにつれて、益々廣さと強さを増して来る。併しながら、それは、吾々の習性に束縛されて、吾々の意見によつて多小變化する。此の變化する以前の傾向こそ、私が吾々の内にひそんでゐる自然性と呼ぶところのものなのだ。

そこで、爾餘の一切を此の最初の傾向の方へ向けなければならぬ。それは、吾々の三つの教育がたゞ異つてゐるといふだけなら譯なく出来る。ところがそれ等が互に矛盾してゐたらどうするか？ 或る人をその人自身の爲めに教育せずして、他人の爲めに教育しようとする場合には、此の一致は到底不可能である。此の場合には吾々は自然と闘ふか、社會制度と闘ふか何れかを餘儀なくされ、人を造るか市民を造るか、どちらかを選択しなければならぬことになる。何となれば兩者を同時に造ることは出来ないからである。

一切の部分的社會は、その團結が緊密で鞏固である時には、大きな社會から背離する。愛國者は凡て外國人に冷酷である。愛國者の眼から見ると外國人は單なる人に過ぎず、彼等にとつては何でもないのである。(註五) 此の缺點は避けることが出来ない。併しこれはあまり重大なことではない。大切なことは人々が共に生活してゐる隣人に對して親切であることである。スパルタ人は外部に對しては野心に富み貪慾不正であつた。併し、その城内には、無私と公平と和親とが満ちてゐた。身邊の隣人に對する義務を怠りながら、古い書物の中の縁もゆかりもない人に義務をつくさんとする博愛主義者達は唾棄すべき人達である。こんな哲學者は彼等の隣人を愛する代りに韃靼人を愛するものだ。

(註五) 尤も共和國の戰爭は君主國のそれ以上に慘酷ではある。併しながら、假令國王の戰爭がはげしくなつても、おそろべきはその平和である。彼等の臣民となるよりもその敵となる方がましである。

自然人 *l'homme naturel* は全く彼自身の爲めに生存する。彼は數の單位である。絕對完全體である。彼は彼自身並にその仲間に対してだけしか關係をもたない。社會人 *l'homme civil* は分母に支配される分數的單位に過ぎない。而して、社會といふ全體との關係にのみその價值があるのである。善良な社會制度といふのは人間を最もよく不自然にすることの出来る制度である。個人の絶對的存在を剝奪して、これに相對的存在を興へ、社會といふ統一體の中へ自我を併呑してしまふ制度である。こんな風にして、各個人は最早や自らを完全な一單位であるとは信じないで、社會といふ統一體の部分であると信ずるやうになり、全體の一部分としてしか自己を意識しなくなるのである。ロオマの市民はカイユスでもなければリュシユスでもなかつた、それは一個のロオマ人であつた。彼はひたすらに國家をのみ愛して彼自身を顧みなかつた。ロオマの勇士レギユリユスは、カルタゴ軍の俘虜となつたとき、自分をカルタゴ人だと稱して、外國人だからといふので、ロオマの元老院の席につくことを拒絶した。そしてそれを承諾させる爲めには或るカルタゴ人が命令しなければならなかつた。彼は彼の生命を救はうとした人を罵り、遂に我意を貫徹して勝ち誇つて歸つて死刑に處せられた。こんなことは吾々の知つてゐる今日の人々には夢想だもできないことのやうに私には思はれる。

スバルタ人のベダレトは三百人議會の議員にして貰ふ爲めに議事堂へ出頭した。ところが彼は議員になることを許されなかつた。そこで彼は、スバルタには自分よりも偉い人が三百人も居るといふことを發見して大喜びで議事堂から歸つて來た。(註六) 此の行爲は空威張のものでなく衷心から出た眞面目なものであつたと私は考へる。而して又それが眞面目なものであつたと信ずべき理由がある！これがつまり市民なのだ。

(註六) *Plut., Diot. not. des Tacod. sec. 60*

スバルタの或る女は、息子を五人まで戰場に出して、そして戰爭の消息を待つてゐた。そこへ奴隸の使者が着いたので、彼の女は心配に慄へながら戰爭の模様を訊ねた。『貴女の御子息様は五人とも戦死なされました。』此の下部、誰がそんなことを訊ねた？ 『戰爭は吾軍の勝利でござりました！』これを聞くと此の母親は直ちに神殿へ駆けつけて、神々に感謝の祈禱をさへげた。(註七)。これが女市民なのだ。

(註七) *Ibid. sec. 5.*

社會的秩序の中にありながら自然の感情の優越を維持しようとする人は、自分で何をしようとしてゐるかを知らないのだ。こんな人は常に自分自身に逆らひ、自分のもつてゐる自然の欲求と自分の社會的義務とどちらについたものかと歸趨を決し兼ねて、何時になつても人にもならず市民にもならず終るだらう。こんな人は自分の爲めにも又他人の爲めにも役に立たぬであらう。現代の人は皆さうである。フランス人でも、イギリス人でも、ブルジョアでも、これでは何にもならないであらう。

吾々が何物かになる爲めには、自分自身たらんが爲めには、而して常に一個の人たらんが爲めには、言行一致しなければならぬ。何時でもどちらへつくかを決めて、斷乎として常に邁進してゆかねばならぬ。私は誰かこの奇蹟的人物を示してくれるのを待つてゐる。これが示されると此の人間が人であるか或は市民であるか、それとも如何にして同時に兩者たらんとしてゐるか、わかるわけだ。

此の必然的に相反した目的から、二つの全然相反した教育法が生じて來る。即ち一は社會的、

公共的のもので、他は個人的、家庭的のものである。

社會教育に就いて知りたいと欲する人は、プラトオの『^{レヒテラフ}國家家』を讀むがいゝ。これは書物の標題ばかりで内容を早合點する人が考へてゐるやうな政治的の著述では決してない。これは今日までに書かれた教育論の中で最も立派な教育論である。

理想國のことを云々せんとする時、世人は常にプラトオの教育を引きあひに出す。併し若しリキニルグスが彼の説を悉く書物にして遺してゐたに過ぎなかつたら、それはプラトオの教育論よりも遙かに空想的なものであつたらう。プラトオは人心を淨化したにとゞまるが、リキニルグスは人心から自然性を奪つてしまつたのである。

今では最早や社會教育は存在しない。而して最早や存在し得ないのである。何故かといへば、既に國家が無い以上、市民はあり得ないからである。國家と市民、此の二つの言葉は近代の言語から抹殺されねばならぬ。私はその理由をよく知つてゐる。併し私はそれを言ひたくはない。それは私の言はんとする問題には毫も關係がないからだ。

私は世人が學校と呼んでゐる滑稽な建物(註八)を社會教育の機關だと思はない。世間の教育などは私はもはや勘定に入れない。何となれば、此の教育は、二つの相反した目的を追及して、二つとも取り逃してゐるからである。こんな教育は、何時でも他人の爲めに働いてゐるやうに見せかけてゐながら、その實決して自分自身の爲めにしか働かない所の裏表のある人間をこしらへるだけの役にしかたゝない。ところが此の偽善は凡ての人に共通であるから、誰もそれには欺かれない。幾ら見榮を張つても張るだけ無駄骨折である。

(註八) 多くの學校、特にペリ大學(原稿にはジュネエヴのアカデミー及びペリ大學となつてゐる——譯者)には私の愛

し且つ非常に尊敬してゐる教授達がゐる。此等の教授達は既存の習慣に束縛されてゐなかつたならば若い人々を立派に教育してゆくことが出来る人達だと私は信じてゐる。私はこれ等の人々の中で誰かゞその胸中に抱いてゐる改革案を發表されることを勸告する。世人も恐らく救済策が無いのではないといふことがわかれば遂には悪弊を救済しようといふ氣になるであらう。

此の矛盾から、吾々が絶えず内心に經驗してゐる矛盾が生れて来る。吾々は自然と人間とに兩方から反對の方向へ引つ張られて、此の相異なつた二つの力に自己を分割することを餘儀なくされ、兩者に妥協してその中間の道を通つて行くのである。この道は吾々を自然にも連れてゆかないければ人間にも連れてゆかない。こんな風に吾々は人生の全行旅を通じて二つの力と戦ひつゝ、何れにつかつかと惑ひつゝ、自ら安んずることも出来ず、吾々自身の爲めにもならず、他人の爲めにもならずに一生涯を終つてしまふのである。

最後に残されたものは家庭教育或は自然の教育である。だが單に自己の爲めにのみ教育された人は他人に對してはどうなるだらうか? 若し吾々の欲する二つの目的を、一つに統一することが出来るならば、人間の矛盾は取り除かれて人間の幸福への大障礙は除去されるだらう。これを判斷する爲めには、人間が全く完成されるのを見なければならぬだらう。彼の性癖を觀察し彼の成長を見、彼の進歩の過程をすつかり見てしまはねばならぬであらう。一言でいへば自然人を知得せねばならぬであらう。私は讀者が此の書物を讀了されたら、此の研究に對し多少得る所があるであらうと信ずる。

此のやうな滅多に無い人を造りあげる爲めに吾々はどうしたらいいか? 疑ひもなくしなければならぬことは澤山ある。要は何もしないのを避けることである。單に風に逆つて船を進めると

いふだけの時には船の進路を變へればいゝ。併し、狂瀾怒濤の中に踏み止まらうとするためには、錨を下さねばならぬだらう。心せよ、若き水先案内者よ、錨索が緩んだり、錨が海底を曳きづられたりして、氣の附かぬうちに船が沖へ出てしまはないやうに。

社會秩序の中では凡ての人の身分がちやんと記しづけられてをり、各人はめいめいその人の身分に應じて教育されねばならぬことになつてゐる。自己の身分に應じて教育された人が、一朝その身分を離れると、その人は最早何の役にも立たなくなつてしまふ。こんな教育はその人の運命が兩親の職業と一致してゐる間だけしか役にたゝない。さもなくなると、かういふ教育は被教育者に有害である。といふのはかやうな教育は被教育者に種々の偏見を與へるからだ。息子が父親の職業を強制的に襲がねばならなかつたエヂプトでは、かやうな教育にも、少くも一の確乎たる目的があつた。併し、階級だけは變らないが、此の階級を構成する人は絶えず變つてゐるところの吾々の國にあつては、息子を父親の身分に應じて教育することが果して息子の利益に反するものでないかどうか、頗る疑問である。

自然秩序の中では、人間は凡て平等であつて、その共通の天職は人間たることである。そして人間として立派に教育された人なら、誰でも、人間に關する何事をやつても出來ないといふことは無い筈である。私の子供が軍人にならうと、牧師にならうと、辯護士にならうと、それは少しも私の關知することではない。兩親の職業を襲がせる前に、自然は子供を人間として生活せしめようとする。生きることこそ、私が彼に學んで欲しく思ふ職業である。私の手から離れた時には、彼は法律家でもなければ、軍人でもなく、僧侶でもないであらうことを私は認める。彼は先づ第一に人間であらう。彼は人間としてなすべきことは、何事によらず必要に應じて學ぶであらう。

らう。運命が彼の位置を變へようとしても無駄にをはるであらう。彼に常に彼の位置にとゞまつてゐるであらう。(おゝ運命の神フォルチュナよ、私は御身を襲つて御身を捉へた、そして御身に都合よいあらゆる通路を皆塞いでしまつた、だから御身は私に手をのばすことは出來ないのだ。)(註九)

(註九) Cic. Tuscul. V, chap. IX.

吾々の眞に學ぶべきは人間の境遇の研究である。吾々の中で、此の人生の善と惡とに最もよく堪へることのできる人が、私の見解によれば、最もよく教育された人である。従つて、眞の教育は他から教へることよりも自から實行させることにある。吾々が生れると同時に吾々の教育は始められるのである。吾々の教育は吾々と同時に始まるのである。吾々の最初の教師は吾々に乳を與へて呉れる生母或は乳母である。それ故に此の教育 education といふ言葉は、古代には、今日では最早や廢つてしまつた一の別の意味をもつてゐた。即ち乳で養ふといふ意味をもつてゐたのである。古代ロオマの詩人ヴァロンはかう言つてゐる(産婆は引き出し、乳母は養ひ、先生は訓育し、教師は教へる)(註一〇)と。斯くの如く、養育と、訓育と、教育との三つは、嫁母と、訓育者と、教師との三つが異なるやうに、それぞれ目的を異にしてゐるのである。併しながらこんな風に區別するのはよくない。立派に教育される爲めには、子供は唯だ一人の指導者のみに導かれねばならぬ。

(註一〇) Non. Malcell.

それ故に吾々は吾々の見解を一般的にし、吾々の子供を抽象的な人間として見ねばならぬ。人生のあらゆる運命に曝された人間として考へねばならぬ。若し人々が生後一箇國の土壤にのみ定

住してゐるものならば、若し一年中同一の氣候がつゞくものならば、若し各人がその運命を保持してゐてそれが決して變る氣遣ひのないものであるならば、従来の教育法にも何等かの取柄があつたかも知れぬ。自分の身分に應じて教育を受けた子供は、それ以外に一步も出ないのだから、他の身分の不便に曝される氣遣ひはなかつたであらう。けれども人事の定めなきを思ひ、前代に建設された一切のものを忽ち次の時代には顛覆する現代の不安動搖を極めてゐる人心を考へて見ると、子供を一步も室外へ出なくともよいものとし、常に僕婢に圍繞せられてをるべきものとして教育するぐらゐ愚かな教育法がどこにあらうか？ 若しこんな不幸な人が一步でも屋外へ踏み出したら、一步でも階段を踏み降りたら、忽ち身の破滅である。かやうな教育は、子供に苦痛に堪へることを學ばせるのではなくて、苦痛を感じさせることを教へるものである。

世人はその子供を保護することばかりしか考へぬが、それでは十分でない。子供が成長の後には自分で自分を保護するやうに教へねばならぬ。運命の打撃に堪へ、貧富を度外視し、必要に應じて氷島の氷の中にでも、マルタ島の焼けつく岩の上にも生きて行くことを教へねばならぬ。子供が死なゝいやりに用心するのは無駄である。子供はどの道死ぬに決つてゐるのだ。眞逆に用心したせゐで子供が死ぬわけでもないが、それにしても死なゝいやりに用心などをするのは間違ひである。子供を死なゝいやりにするよりも生きさせるやうにするのが大切である。生きるといふことは呼吸をすることではなくて活動することである。吾々の器官、感覺、能力、その他吾々に生存の意識を與へる所の吾々の凡ゆる部分を働かせることである。最も長壽をした人とは、最も長い年月を生き伸びた人のことではなくて、最も強く生を感じた人のことである。世の中には百年の長壽を保つて葬られながら生れてすぐに死んだと同じ人がある。若くして墓場に逝つても、せ

めてその時まで立派に生きてゐたならばその人は長生きした人である。

吾々の一切の知識は奴隸的偏見から出來てゐる。吾々の凡ゆる慣習は屈従と強制と束縛とに他ならぬ。文明人は奴隸状態の中に生れて、生きて、死ぬ。生れると産衣にくるまれ、死ぬと棺に入れられて釘付けにされる。そして人間の形をしてゐる間は、種々の制度の鎖で縛られてゐる。或る産婆たちは、生れたばかりの嬰兒の頭を人工的にいじりまはして、その恰形をもつとよく直さうと敢へてし、世人はそれを黙認してゐるといふことである。人間の頭は造物主の造つたままではいけないから、外部からは産婆が匡正し、内部からは哲學者が匡正せねばならぬと言ふのだ。カレイブ人(種人)の方がこんな風にされる吾々よりも餘程幸福だ。

『子供は、母の胎内を出ると直ぐに、又四肢を動かしたり伸したりする自由を享樂し初めると直ぐに、忽ち新しい束縛を與へられる。襁褓でくるみ、頭を眞直に固定し、脚を伸し、腕を體の兩側に伸して寢させられる。姿勢を變へることが出來ないやうに、あらゆる布や帯でぐるぐる巻きにされる。呼吸が止まる程強く壓しつけられなければまだしも幸ひである、排出されねばならぬ體中の水氣が自然に口腔から垂れるやうに横向きに寢させられ、ばまだしも幸ひである。何となれば、子供は、水氣の排出を容易にする爲めに、頭を横向きに轉ずる自由がまるで利かないのだから。』(註一一)

(註一一) ビュツフォン『博物誌』第四卷、一九〇頁。

嬰兒は四肢を伸したり動かしたりすることが必要である。それは四肢が長い間靜止して、一つ處にかたまつて麻痺してしまはない爲めにある。成る程世人は子供の四肢を伸してやることは事實だが、それを動かすことは妨げる。それどころか、頭ですら頭巾を被せて窮屈にするのであ

る。まるで子供が生きてゐるやうな様子をするのを惧れるのかと思はれる程である。こんな風に成長を求めて已まない身體内の各部分の衝動がこれに必要な運動をしようとする、直ちに打ち克ち難い障碍に遭遇するのである。その爲めに子供は頻りに無益の努力を繰り返して、その體力を消耗し或はその發育を遅れさせる。子供は母親の胎内に居た時でも、襁褓に包まれてゐる時程には、甚しく狹隘を感じず、窮屈でなく、束縛を受けなかつたのだ。私には子供が何の爲めに生れて来たのかわからない。

子供の四肢を動かさないやうに束縛して置くことは、血液と體液との循環を妨げる以外に何の取柄もない。子供の身體が強健になり、成長してゆくのを邪魔し、子供の體格を損する以外に何の取柄もない。こんな餘計な世話を焼かぬ處では人は皆大きく強く姿勢が整つてゐる。子供を襁褓でくるむ國には、佝僂や、跛歩や、彎脚や、發育不良の人や、一寸法師や、その他あらゆる種類の不具者がうようよしてゐる。子供に自由な運動をさせると不具になりはしないかと惧れて、人々はこれを束縛して不具になるのを早めるのだ。子供を不具者にもまいとして、わざわざ運動不隨の廢人にしてしまふのだ。

こんなに慘酷な束縛は、子供の體質に害を及ぼすと同時に、子供の氣質にも害を及ぼさずにはやむだらうか？ 子供の心に最初に起る感情は苦痛の感情である。彼等は彼等がしたいと思ふ運動を悉く妨げられる。獄裡の囚人よりもつと可哀想だ。そこで彼等は無益に藻掻いて、憤つて泣くのだ。子供の最初の聲は泣聲だと諸君は言ふではないか？ 私もその通りだと思ふ。諸君は生れるとすぐから子供に逆らふのだ。子供が最初に諸君から貰ふのは鐵鎖だ。子供が最初に經驗する待遇は苛責なのだ。彼等のもつてゐるもので自由なものは聲ばかりだから、何うしてそれを用ひ

て不平を叫ばずにゐられやうか？ 彼等は諸君が彼等に加へる苦痛に反抗して泣くのだ。こんなに束縛されたら諸君は子供よりもつとひどく泣くだらう。

こんなに不合理な習慣、不自然な習慣は一體何處から來るのか？ 母親がその第一の義務を蔑んで、自分の子供に乳を與へることを拒むやうになつて以來、金錢で傭つた乳母に子供等を委せねばならなくなつた。乳母はこんな風にして他人の子供の母となるのだから自然の愛情は少しもなく、たゞ自分の骨折りを避けようとばかりしかしない。子供を自由にして置くの間斷なく見張りをしてゐなければならぬが、これをよく縛つて置けば、隅つこに投つてをいても泣き聲に煩はされずすむ。哺乳を怠つたといふ證據さへなければ、子供の手足に別條さへなければ、その餘のことは、子供が死んだつて、後に弱くなつたつて何の關するところがある？ 胴體はどうなつても、手足さへ大切に置いて置けば、何が起つても乳母は辯解が出来るのだ。

子供の煩累から免れて都會の歡樂に嬉々としてゐるいゝ氣な母親たちは、田舎で、自分たちの子供が、襁褓の中で何の様な取り扱ひを受けてゐるかを知つてゐるだらうか？ 乳母は一寸した面倒がおこると、まるで紐で括つた小包か何そのやうに、子供を釘に吊して、急ぎもせずにくすぐずと自分の用を足し、子供は可哀想に釘づけにしてはつてをかれるのだ。此のやうな状態に置かれると子供の顔は皆紫色になる。胸が強く壓しつけられて、血液の循環が不自由になるから、血液は頭へ上つてしまふのだ。すると子供は泣く力さへも無くなつてゐるのに、乳母は大層子供が静かになつたと思つてゐるのである。私は、こんな状態に置かれた子供が何時間死なずにゐられるか知らないが、さう長く長く氣遣ひは無いと思ふ。何のことはない、これが襁褓の最大の功德の一つなのだ、と私は思ふ。

子供を自由に置いて置くと、姿勢が悪くなり、四肢の形態を傷ふやうな運動をする虞れがあると主張する人がある。それは吾々の誤つた知識からする出鱈目な推論に基くので、何等経験によつて確證されたものではない。吾々よりもよく道理を辨へた國民の中には四肢を全く自由に育てられた子供が澤山あるが、一人だつてそのために怪我をしたり不具になつたりするものはない。一體子供といふものは危険になる程の強い運動が出来るものではない。そして萬一彼等が危険な状態に臨むやうなことがあれば、その爲めに生ずる苦痛が彼等に直ぐその状態を變へるやうに知らせてくれるものだ。

吾々はまだ犬や猫の兒を襁褓で包まうと、考へたことはない。併しこれを怠つたが爲めに彼等に何等かの良くない影響を及ぼしたことがあるか？ 子供といふものは割合に重い。成る程その通りだ。併しながら子供はまたそれと同時に甚だ弱い。自分の力で動くのがやつとやつとだ。何うして片輪になることが出来るものか？ 若し彼等が仰向けにして置かれたなら、さうしたまゝで彼等は、まるで龜の子のやうに、寝返りを打つことも出来ずに死んでしまふだらう。

婦人達は子供に乳を與へなくともいふやうになると、それだけでは満足しないで、もう二度と子供をこしらへまいとする。その結果はわかりきつてゐる。妊娠するのが厭になるとやがて、それを全く避ける方法を見つけ出す。彼の女等は折角こしらへたものをわざと無駄にしてつて、何回となくそれを繰り返すのだ。そして人類を増やす爲めに與へられた魅力を悪用して却て人類の蕃殖を害する方へむける。此の風習は、その他の人口減少の諸原因と相俟つて、次に來るべきヨオロッパの運命を吾々に豫言する。ヨオロッパが産んだ科學、藝術、哲學、道徳は間もなくヨオロッパを荒蕪の地と化し、そこには兇猛な獸類が横行するやうになり、住民は墮落のどん底に

沈んでしまふだらう。

私はわざと子供に乳を與へたがるやうなふりをする若い女の策略を屢々見た。彼の女等はすぐにそんな馬鹿な考へは思ひ止りなさいと言はれることを知つてゐるのだ。巧みに夫や醫師や特に母親に干渉させるやうにもちこむのだ。妻に子供を養育させて黙つてゐるやうな夫は夫としての資格のない人になる。そんな人は妻を臺なしにしようとする暗殺者と思はれる。そこで思慮ある夫は、子供に對する父としての愛情を犠牲にして、一家の平和を保たねばならなくなるのである。幸にして田舎には諸君の細君よりも貞節な女が澤山ある。若し諸君がかういふ女にその生涯を捧げられたのなら此の上ない幸ひである。

婦人の義務は明白である。所がその義務を蔑んで子供にとつては生母の乳で育てられるのも、他の女の乳で養はれるのも同じことであるといふ議論をする人がある。此の説の是非曲直を決めるのは醫師の役目だが、私の考へでは、醫師は婦人の希望通りの判決を與へてゐるやうだ。(註二二)私だつて、子供には自分の身體をつくつてゐる血と同じ母親の血に、何か別の恐ろしい危険があるといふのなら、不健康な母親の乳を呑むよりも、健康な乳母の乳を呑んだ方がましだらうと思ふ。

(註二二) 婦人と醫師とが共謀してゐることはバリの最も興味ある奇現象の一つであると私は思ふ。醫師が評判の良くなるのも悪くなるのも婦人次第だ。而して婦人は醫師によつて我儘を遂げてゐるのである。バリの醫師が有名になるには、何んな手腕があるかといふことは甚だ如何はしいものだ。

けれども、此の問題は單に肉體的方面のみから考察さるべきであらうか？ 子供は母親から乳を與へられる以外に、もつと大切な注意をして貰ふ必要がないだらうか？ 他の女でも、獸類で

さへも、母親が厭がる場合に、代つて乳を子供に與へることは出来る。しかしこれには母親の愛撫が伴はない。一體自分の子供に吞せる乳で他人の子供を育てるやうな女は善くない母である。此の良くない母がどうして善き乳母であり得よう？ 尤も彼の女は何時かは善き乳母になることが出来るかも知れぬ。がそれまでには長い月日がかかる。習性によつて自然性を變へてゆかねばならぬからだ。乳母が子供に對して母親のやうな愛情をもつに至る迄には、子供は百度も死ぬやうな酷い目に遭ふだらう。

こんな風に乳母がよくなつて来ると、その結果また勝手の悪いことが生じて来る。その爲めに物のわかつた母親は皆自分の子供を他人の手にかけて養はせることを恐れるのだ。都合の悪いことと言ふのは母親の権利が分割されることだ。といふよりも寧ろ母親の権利が他の女に譲り渡されることだ。母親は自分の子供が他の女を生みの母と同じ程、或はそれ以上に愛するのを見なければならなくなる。子供が生みの母親に對してもつてゐる愛情は恩であり、育ての母親に對してもつてゐるそれは義務であることを感じさせられることだ。何となれば、子供に眞の母親らしく世話をした場合に、その子供が眞の生みの子らしい愛情をもたないやうなことがある得るであらうか？

これに對する救済策として、世人は子供に乳母を眞の下婢扱ひをさせて、乳母に對する輕蔑の念を子供の心に吹きこむ。そこで乳母は用がすむと、子供を引きとられるか或は解雇される。育てた子供に會ひに来てもすげなく拒絶される。幾年かの後には子供は少しも乳母に會ふ機會がなくなり、乳母の顔さへ忘れてしまふ。こんな慘酷なことをして過去に於いて自分が子供の注意を怠つた埋め合せをしようとして考へてゐる母親は、あまり蟲が良過ぎる。子供は孝行な息子にはなら

ず之恩知らずの養ひ子になるのだ。かやうな母親は子供に背恩を教へてゐるのだ。現在彼に乳を與へた乳母を輕蔑すると同じやうに、他日彼を生んだ母親をも輕蔑するやうに教へてゐるのだ。

此の有益な問題を幾ら聲を擧げられて絶叫したとて無益だ。さうでなかつたなら、私はもつともつと此の點を執拗に主張したであらう。このことは人々の考へもつかない程多くの事柄に關係してゐる。各人に彼の第一の義務を盡さしめたいなら、先づ母親からはじめろがよい。母親の一家に及ぼす變化は驚くべきものである。母親の墮落から次々に一切の墮落が生ずるのだ。一切の道徳的綱紀はすたれ、自然の姿は凡ての人の胸から消え去る。家庭の内部の空氣は次第に生氣を失つて来る。新しい楽しい家庭の團樂は夫の心を惹かなくなり、他人も尊敬しなくなる。人々は子供たちがそばにゐないやうな母親を殆んど尊敬しない。こんな家庭には家庭生活といふものがない。家族間の血縁の親しみは習性によつて強められることがなくなり、父も母も子供も兄弟も姉妹もなくなる。凡ての人がまるで他人同志のやうになる。互に愛し合ふといふやうなことは思ひもよらなくなる。誰も自分のことだけしか考へなくなる。かうして家庭が陰鬱な佻しいものとなれば、家庭以外の何處かに慰安を求めようとするのは無理もないことである。

ところが母親がその子供を自分の手で養ふと風儀はひとりで良くなつてゆく。自然の感情が凡ての人の心に目醒めてくる。國の人口は増えて来る。此の最初の一步、即ち母親の心掛一つで凡てがまとまつてゆくのである。家庭生活の楽しみは悪風俗の最良の解毒劑である。人々の煩さがる子供の遊びを見ることも愉快になつて来る。その爲めに父と母とは益々親しみを増し、愛情を加へて来る。夫婦のきづなは益々緊密になつてゆく。家庭が生々生きと快活になつてくれれば、いろいろの家事は妻にとつてはうれしいつとめとなり、夫にとつては楽しい慰安となる。斯くの

如く、此の唯一の病弊を匡正すれば、やがてその結果は全體の改善となつてゆく。自然はその凡ての権利を取り返して來るのである。一度び婦人が母となれば、やがて男子は夫となり、父となるのである。

だがこれは無用の議論だ！ いくら現世の歡樂に退屈しても、こんな議論を聴く人はない。婦人等は最早や母になる事を止めたのだ。最早や母になる氣がないのだ。彼女等は最早母にならうとは欲しないのだ。萬一母になりたいと思ふ女たちがあつても、もはや容易になれなくなつてゐる。即ち今日では是に反對の習慣が牢乎として築かれてゐるから、誰も進んで此の習慣に反抗する者もないし、よし、たまたま革新婦人が現はれて反抗しても、それについて來る者がない。だから、かういふ婦人は、結束して舊い習慣を墨守してゐる周圍の一切の婦人を敵に廻して一人で戦はねばならぬであらう。

けれども猶時々善良な自然性をもつた若い婦人たちを見出す。彼の女等は世論に反抗し、多數婦人の喧々囂々たる反對を物ともせず、自然が彼女たちに與へた美しい天職を斷乎たる勇氣をもつて果さうとするのだ。どうか、かうした婦人たちに授けられる様々の利益に心をひかれて、風を望んで集る婦人たちの數を多くしたいものだ！ 最も單純な推理が與へる結論と、嘗つて反對されたことのない確實な觀察とに基いて、私は敢へて約束する。かゝる尊敬すべき母親たちは、夫からはいつも變らぬ愛を受け、子供からは心からの孝行を捧げられ、世人の尊敬を集め、産の時は不慮の災ひもなく、餘病も起さずして安産し、強壯な健康を享け、遂には、他日自分の女兒がこれを模範として倣ひ、一世の龜鑑となるを見るの愉快をもつに至るに相違ない。

母親が母親でない子供も子供でなくなる。彼等の中の義務は相互的である。一方がその義務

を果さなければ他方もそれを怠る。子供は何故母を愛しなければならぬかを知る前に母を愛すべきである。けれど、若し此の血縁の聲が、日常の習性と注意によつて強められなかつたならば、それは生後數年にして消えてしまひ、愛情は言はゞ生れぬ前に死んでしまふ。かうして吾々は世に出た抑々の始めから、既に自然の道を踏み外してゐるのだ。

又、これとは反對の道から自然の道を踏み外すものもある。即ち或る女は母親たる注意を怠る代りに、それを極端にやり過ぎるのである。かういふ女は子供を偶像のやうに下へも置かず到大切がり、子供に彼の弱さを知らせまいとして、却つて子供の弱さを増す。自然の法則から子供を免れさせようとして、彼を苦痛から遠ざけ、一時の不便を省く爲めに、子供の頭にどれだけ未來の災ひと危険とを積み重ねてゐるかを知らない。疲勞と戦はねばならぬ大人の時代まで幼時の羸弱をひき延すのが如何に馬鹿げた無鐵砲な用心であるかといふことを夢にも考へない。海神テチスはその息子アキレスを、斬つても傷がつかない程壯健にしようと思つて、彼をステクス河へ投げこんだギリシャ神話に書いてある。此の話の寓意は立派なものだ。そして明白だ。ところが私が今話してゐる慘酷な母親達の遣り方はこれとは反對だ。彼の女達はその子供を柔いもの、中において、わざわざ子供の苦痛を準備してゐるのだ。凡ゆる種類の災禍の入り込む穴をから開きにして、はいり放題にさせておくのだ。これでは大人になつてからそれにとつつかれないのが不思議な位だ。(註一三)

(註一三) エミールと前後して、ジ、ユ、エ、ヴ、の、一市民の著として、兒童の教育について、の論文 *Dissertation sur l'éducation physique des enfans*、と云ふ書物が刊行され、その中にルソオと同じ原則がのべてある。ルソオは此の題辭に *〇五つ、體操録*、第十一編で不平を言つてゐる。この不思議な暗合については *Histoire de J.J. Rousseau* の十五頁とそ

自然を見よ、そして自然が教へる道を通つてゆけ。自然は絶えず子供を鍛へる。自然は凡ゆる艱苦によつて子供の體質を強壯にし、早くから彼等に苦痛がどんなものであるかを教へる。齒が生える時は彼等に熱を與へる。鋭い痛みは彼等に療養を起させる。長い咳嗽は彼等を窒息させる。腹の蟲は彼等を苦しめる。多血症は彼等の血液を腐敗させる。種々の病毒は體中に酸酵して危険な發疹を惹きおこす。生れてから殆んどまる一年間は子供は病氣と危険に悩まされどほしなのだ。生れた子供の半分は八歳までに死んでしまふのだ。これ等の苦しい経験がすんでしまへば子供は體力を獲得して来る。そして此の子供が成長して活動することが出来るやうになれば、この原則は益々確實なものになつてくる。

これが自然の法則なのだ。諸君は何故それに逆ふのか？ この法則を矯正しようと思へるのは自然の大業を破壊し、自然の折角の心づくしの効果を邪魔することになるのがわからないのか？ 自然が内部からすることを外部からするのは、危険を倍加することだと諸君は考へてゐるが、これは、その反對に危険を他へそらし、その度を弱めることになるのだ。経験によると、大切に育てられた子供は、さうでない子供よりも死に易い。度を過ぎない限りは、子供に體力を使はせないで置くよりも、どしどしそれを使はせた方が却つて危険が少ない。それ故にやがて彼等が遭遇せねばならぬ苦痛に彼等を慣らすがいゝ。四季の不順や、種々の氣候や、自然の條件に子供をさらし、饑餓、涸渴、疲勞を経験させて、彼等の身體を鍛錬させるがいゝ。スチクスの河の中にも浸らさせるがいゝ。身體にくせがつかないうちは子供の身體は何んなにしても危険はない。しかし一度び體格が固まつてくると一寸した變化を與へても危険になる。大人が堪へることの出

來ない變化にも子供は堪へることが出来る。それは子供の筋肉は柔軟で、伸縮自在で、容易に自由になるけれども、大人の筋肉はこれに比べると甚だ剛直で、暴力を用ゐなければもとの形を變へることが出来ないからである。子供の身體はその生命や健康を危険にさらさなくともこれを強壯にすることが出来る。又多少の危険があつても躊躇するには及ばない。どうせこれは人間生活から離すことの出来ない危険なのだから、それを最も害の少ない時に與へるより外に良策はないのである。

子供はその年齢が増すに従つてその價值を増して来る。彼自身の價值の外に幼時に受けた様々な手當でのそれが加算されてくる。單に生命がなくなるといふことのみではない、その心に生ずる死の觀念が附加されて来る。それ故に子供を育てゆくにあつては、取りわけ未來のことを考へなければならぬ。青年時代になつてから病氣にかゝらぬやうに青年にならぬうちに十分用心して置かねばならぬ。何となれば、若し生命の價值を十分に利用し得る年齢になるまで生命の價值が増してゆくとしたなら、幼年時代の少々の勞苦を避けて、大人になつてからの苦痛を増すぐらゐる愚かなことはないからだ！ ところがこれが今日教師の教へてゐる所ではないか？

絶えず苦しむのが人間の運命である。自ら生存しようとするのが抑も苦痛を伴ふ。幼年時代に肉體の苦勞だけしか知らない人は幸福である。肉體の苦勞は精神の苦勞に比べると、それ程酷でもなく、それ程悲痛でもなく、且つ肉體の苦痛の爲めに自殺するやうなことは殆んど無いからである。痛風の痛みで自殺するやうな人は決してない。絶望する人は必ず心の悩みをもつた人である。吾々は子供の境遇を憐むがそれはお門違ひだ。眞に憐むべきは吾々大人の運命なのだ。吾々の最も大きな苦痛は吾々が自らこしらへた苦痛だ。

子供は生れるとすぐに泣き出す。彼はその幼年期の初期を泣いて過すのである。吾々は或る時は揺ぶつたり宥めたりして子供の機嫌をとるが、或る時は泣き熄ませる爲めに子供を嚇したり打つたりする。吾々は或る時は子供の好むことをしてやり、或る時は吾々の欲することを子供に要求する。或る時は子供の嗜好に従ひ、或る時は吾々の嗜好に子供を従はせる。決してその中間をとらない。子供は命令を與へるか命令を受けるか、いづれか一方を選ばねばならぬ。そこで子供は物を言ふことを覺えない前に命令し、實行することの出来ない前に服従する。時としては、子供はまだ自分の行爲の善悪を知らない内に、否な寧ろ何もすることのできない内に過失を罰せられる。斯くの如くして、吾々は早くから、子供の幼い心に種々のひがみ根性を注入し、これを自然の爲業に歸して、自分がねぢけ者にして置きながら、子供がねぢけ者になると困つたものだと嘆息する。

こんな風にして子供は六七年女親の手で育てられ、女親の氣紛れと彼自身の氣紛れとで散々に悪化し、女親から色々なことを教はり、まだ理解することも出来ない言葉や、少しも子供に役立つたぬ事柄やを記憶の中に一杯詰めこみ、心の中に植えつけられた種々の情慾で自然性をすつかり殺してしまつた揚句に、この不自然な代物が家庭教師の手に移されるのである。すると家庭教師は子供の心中にすつかり出来上つてゐる人工的の幼芽を育て上げ、これを完成し、自己を知ること、自己を働かすこと、生活を知ること、自己を幸福にすることは教へないで、それ以外の一切のことを子供に教へる。遂に、此の子供は奴隷でありながら同時に暴君になる。いろいろなことは知つてゐるが、分別は薩張りない。そしてかうして弱い身體と弱い精神とを以つて世間の中へ投げ出され、その無能と尊大とその他の凡ゆる惡徳とを容赦なくさらけ出すことになるのである。

ところが人はこれを見て人間は淺ましいものだ、悖徳な動物だと浩歎する。だがこれは世間の人の間違ひだ。これは吾々の無定見によつてこしらへられた人間なのだ。自然のままの人間はこれとは全然異つた方法でつくられる。

諸君は、子供を自然のつくつたまゝにして置きたいと思ふなら子供が生れた時から自然の姿を保持してゆくがよい。子供が生れるとすぐから手をつくして、彼が大人になるまで手を離してはならぬ。さうしなければ諸君の希望は所詮成功する氣遣ひがない。眞の乳母が母であると同じく眞の教師は父である。父と母とは協力してその職務を分擔し、一致した方針の下に子供を教育しなければならぬ。子供は代る代る二人の手に渡されねばならぬ。世界第一の名教師に教育されるよりも、知識は無くとも分別のある父親に教育される方が子供の爲めには良いであらう。何となれば才能は熱心の代りには殆んどならぬが、熱心はよく才能の不足を償ふからである。

けれども父親には、やれ仕事だの、やれ職務だの、やれ義務だのと色々爲すべきことがあるといふのであるか？ 成る程疑ひもなくいろ／＼な義務はある！ そこで父としての義務は一番後廻しにされるのだ。(註一四)妻が夫婦の結合の果實たる子供に乳を與へるのを厭がつた家庭では、夫も子供を教育するのを厭がるのは惟むに足らぬ。凡そ世の中に家庭生活の畫面にまさる美しい畫面は又とない。併し此の畫面に一點一劃でも不足する所があると、他の全體が壞れてしまふ。母親が健康にさはるからといつて子供に乳を吞ませない家庭では、父親は業務多忙だからと言つて子供を教育しないことになる。父母の手元から離して寄宿舎や修道院や學校に出した子供は、父家に對する愛を他所にもつてゆくやうになる。もつと適切に言へば、彼等は何物にも愛着しない習性を父家へ持つて歸ることになる。兄弟姉妹は互に殆んど交際しなくなる。祝ひ事でもあつ

て皆が集るやうなことがあつても、互に他人行儀で四角ばつて、ろくに口を利かなくなる。肉親の間に親しみがなくなり、家庭の交際が人生の楽しみではなくなると、これを憤ふ爲めに人は悪徳の助けをかりなければならなくなる。どの様な愚人にでもこの關係がわからないことはなからうか？

(註二四) フリユタルクの『ギリシヤ、ロオマ英雄傳』を讀むと、有名なロオマの都察官(カトオ)は彼の息子を搖籃時代から自分の手で育て、而かも非常に熱心で、乳母、即ち母親が、子供の襁褓をとりかへて湯浴みさせる時には萬事を擔してその傍についてゐたといふ事が書いてある。又スエトニウスの『十二帝列傳』を讀むと、自ら世界を征服し世界を支配したオーガスト大帝は自分の手で彼の息子等に讀み書き、水泳、學問の手ほどき等を教へ、たえず彼等の傍から離れなかつたといふことが書いてある。吾々はこんなに無邪氣な兒童を楽しんでゐた、當時の愛すべき、善良な、そして現代のえらい人物達のやうな大事業に従事することが疑ひもなくなかつた凡庸な人々を思ふと微笑を禁ずることが出来ないのである。

父親は子供を生んでこれを養つただけでは、まだ彼が課せられた任務の三分の一しか果してゐないのである。彼は人類から人間を預つてゐるのである。社會から社會人を預つてゐるのである。國家から市民を預つてゐるのである。この三つの負債を支拂ふことが出来るに拘らず支拂はない人は悉く罪人である。而してその半分だけしか支拂はない人は更に罪が深い。一體父としての義務を果すことの出来ない人は父となる權利がないのだ。貧困の爲めだとか、仕事が忙しいとか、世間體が悪いとかいふことは、自分の手で子供を養はなくてもいゝ言ひ譯には決してならぬのだ。讀者よ、私の言を信ぜよ。私は何人たるを問はず、人間の心をもちながらこれ程神聖な義務を怠つてゐる人に豫言する。こんな人は他日自分の過失に對し悔悟の涙をそそぎ、永久にこの悲痛を慰安されることが出来ぬであらう。

併しながら、世間の富裕な人、事務多端な父親は何うしても子供の世話が出来ないと言ひ張る人はどんなことをするか？ 彼は他人の家庭教師を備うて彼自身のすべき義務を他人にして貰ふのだ。此の拜金主義者よ？ 一體君は息子に金でいま一人の父親を買つてやる事が出来るかと考へてゐるのか？ 血迷つてはいけない。君がこんな風にして子供に與へてゐるのは家庭教師でさへもないのだ。それは金錢づくの傭人だ。こんな傭人に教へられると子供もやがて傭人根性をもつやうになるだらう。

善い教師は何んな資格を具備してゐなければならぬかに就いて盛に論ぜられてゐるが、先づ第一に私が要求する資格は、決して金で買ふことの出来ない人であること、これだ。その他の多くの資格は此の第一の資格の中に含まれてゐる。世の中には何うしても金では自由にならぬ高尚な職業がある。金づくでやらうとしても何うしてもやれない程偉大な職業がある。軍人とか教育者のやうな職業がそれである。それでは自分の子供は誰が教育したらよいか？ と問ふ人があるだらう。私は既にそれは君自身より他にないど答へて置いた。自分には子供の世話が出来ないといふ人があるかもしれぬ。：：君が何うしても出来なければ、一人の友人に頼み給へ。それより外に私は手段を知らない。教師！ おゝそれは何といふ崇高な精神だらう！：：人間をつくるには父となるかさもなければ人間以上のものとならなければならぬ。それを諸君は金で買つた傭教師にまかして平氣でゐようといふのだ。

此のことを考へれば考へる程益々新しい困難に氣がつく。教師は教へる生徒の爲めに教育されてゐなければならず、傭人は主人のために教育されてゐなければならぬといふ風に、子供に接する人々は悉くその子供に傳へねばならぬところの知識経験を具備してゐる必要がある。かくして

教育の必要はそれからそれへと無限に遡ぼつてゆく。自分が十分に教育されてゐない教師が何うして子供を満足に教育することが出来るようぞ？

此のやうな理想の教師は到底見出すことが出来ぬだらうか？ 私はそれは知らない。現代のやうな腐敗した時代に於いて、人間がどれ位の高きまで向上し、到達し得るかは何にだつてわかりはしない。けれども假に此のやうな教師が見付かつたとしても。此の理想の教師が何んな人ではなければぬかは、彼が何をせねばならぬかを考へて見ればわかる。善良な教師はどんな資格を具へてゐなければならぬかを十分に感知する父は、必ずや教師などは備はずに済まさうと決心するに相違ないと私は思ふ。何となればこんな理想の教師を探し出すのは自分で教師になるよりもずつと骨が折れるからである。それでは彼自身が友人となつて、彼の息子を教育しようとするか。さうすれば彼は別にこれを探す手数が省ける、そして自然は既にその事業の一半を成し遂げたことになる。

或る人が私に彼の息子を教育して貰ひたいと申し込んだことがある。私はその人が高い身分の人であるといふことだけしか知らなかつた。疑ひもなく彼は私に非常な名譽を興へたのだ。けれども私がそれを拒絶した時に彼は不平を言ふどころか私の分別を買つて呉れねばならなかつたのである。若し私が彼の申込みを承諾して、教育の遣り方に失敗したら、子供の教育はまるで駄目になつたであらう。若し私が成功したら更に悪い結果を見ることになつたであらう、即ち彼の息子はその位階を棄て、しまつて、最早や公爵などになりたくなくなつたであらう。

私は教師の義務の重大なことを餘りに好く知りぬいてゐる。こんな申し込みを承諾するにはあまりに無能力であることを感ずる。どんな人から申し込まれてもそれは同様である。その人と友

一 人關係があるやうな場合には私は尙更飽くまでもこれを拒絶するばかりだ。此の書物を讀了した人は私に對してこんな申込みをしないであらうと私は信ずるが、若し未だそんな人があるならばその人に無駄骨折りをさせないやう切望しておく。私はかつて此の職業に手を染めたことがあるが、それによつて私は自分がかういふ職業に適しないこと、而して、萬一私の才能がそれを許しても私の事情が到底それを許さないことを十分に確かめた。私は、私の言葉を十分信用しないで、私の眞意を疑ひ、私が宜い加減なことを言つてゐるのだと思つてゐるらしい人々に對して、この點を公言しておかねばならぬと考へたのである。

私は最も有益な子供の教育を實行することが出来ないのだから、せめてもつと容易な仕事をやつて見ようと思ふのだ。多くの人の例に倣つて、私は教育そのものは實行しないで、これを筆にしようと思ふのである。爲さなければならぬことを實行する代りに、それを言つて見ようと思ふのである。

此のやうな書物を書く場合には、著者は、それを實行する役に當たらなくともいふものだから、勝手に自己の説を進めて、實行することの出来ないやうな多くの立派な教訓を無難作に並べたてるが、細目をのがし、實例を示さないで、その所説の實行し得る部分さへも、その應用方法を示してゐない爲めに無益の談議に陥り勝ちであることを私は知つてゐる。

それ故に私は、こゝに假に一人の生徒を想像して、この生徒に教育を施すに足る年齢、健康、知識並びにその他の一切の才能が私に備はつてゐると假定し、此の生徒が出生してから成人になつて、彼自身以外にはもはや他人の教導を必要としなくなるまで、此の想像上の生徒を教育して見ようと決心した。此の方法は、實際を忘れて空想に走るまいと用心する筆者をして空想を免れ

しめるには有効な方法だと私は思ふ。何となれば、筆者は普通の教育法を離れるや否や、彼の獨特の教育法をこの子供に試みねばならなくなり、やがて、その教育法が子供の發育に適従し、人心自然の進歩に適従してゐるか否かに彼はすぐに氣がつくだらうし、又讀者が彼に代つて氣がつくだらうからだ。

私は萬難を排してこれをやつて見ようと企てたのである。此の書物を徒らに老大にしない爲に、私は何人もそれが眞理だといふことを疑はないやうな確實な原理はそれを掲げるだけで満足することにする。しかし證明する必要がある規則に就いては、私はこれを悉く吾がエミールに適用し、或はこれを他の子供に適用して、私の説が實行し得るものであることを廣く且つ詳細に説明することにした。せめてこれだけの方針は守つてゆきたいと私は思つてゐる。私が成功したか否かは讀者の方で判斷してほしい。

私が最初エミールのことを殆んど口にしなかつたのはそのためである。何故かといふと私の教育の第一の格律は、現在行はれてゐる教育のそれとは相反してゐるけれども、甚だ明白であつて、理性を具へた人なら何人もこれに同意を拒むことが出来ないものであるからだ。しかしながら、筆を進めてゆくにつれて、諸君の子供とは異つた教育を受けた私の生徒は、普通一般の子供ではなくなつて来る。特別の管理が必要となつて来る。さうなるとエミールは頻繁に書中へ現はれて来る。終には彼がそれについて何と言はうとも、毫しも私を必要としなくなるまで、私は寸時も彼から眼を離さないやうにする。

私はこゝで良い教師が何んな資格を具備してゐなければならぬかに就いては一言も語らない。私はそれを假定する。そして私自身がそれ等の資格を悉く賦與されてゐるものと假定する。此の

書物を読んでゆく中には讀者は私が如何に私に種々の資格を與へてゐるかどうかわかるであらう。

私は唯だ、一般の意見に反して、子供の教師は若くなければならぬといふことだけを指摘して置く。賢明な人であることさへ出来れば若い程よい。若し出来るなら教師自身が子供だといふと思ふ。さうすれば彼は子供の樂しみを自分も樂しみつゝ子供の信任をひきつけることが出来る。一體子供と大人との間には、兩者間の距離をしつかりと結びつけるに足る共通點がない。子供達は時としては老人に媚びる。けれども決して老人を愛することはないものだ。

世人は、これまでに誰かを教育した經驗のある教師をのぞむだらうが、それは無理な註文だ。一人の教師は一人の生徒しか教育することが出来ない。若し二人の教育を試みなければ教育が巧く行かぬといふのなら、彼は如何なる權利をもつて最初の子供の教育に手を着けたのであらうか？

經驗を積みめば、何うしたらよいかといふことはよくわかるが、これを實行することは出来なくなる。此の職業を一度十分に果して、それに伴ふ苦痛を痛切に感じた人なら、誰だつて二度とそれをやらうとはしないだらう。又最初に失敗した人なら、二度目の教育だつてうまくゆかない道理だ。

四年間子供にたゞ隨つてゆくことゝ、二十五年間子供を導いてゆくことゝは大變な相違だと私は信ずる。諸君は子供が既に出来上つてしまつてから彼に教師をあてがつてゐる。私は、子供がまだ生れない前に教師をあてがつて置きたい。諸君の教師は五年目毎に生徒を變へることが出来るが、私の教師はいつまでも一人しか生徒をもたないのである。諸君は子供に物を教へる教師と子供の世話をしたり監督したりする監督者とを區別するが、これまた飛んでもない間違ひだ。抑

も諸君は生徒と子弟とを分けるのであるか？ 子供に教へる學問は一つしかないのだ。それは即ち人間の義務についての學問だ。この學問は一つしかない。クセノフォーンがベルシャ人の教育に就いて何を言つたにしろ、この學問は分つことの出来ないものだ。おまけに私は此の學問を教へる先生を教師といふよりも寧ろ監督者と呼びたい。何となれば子供に物を教へるよりも子供を導く事が彼にとつて肝腎だからである。彼は生徒に何も與へてはならない、生徒に自分で發見させねばならぬ。

教師を選択するにこんなに細心の注意が必要であるならば、教師にも亦彼の生徒の選擇を許してやるのが至當である。取りわけ、これを教育の模範として示す場合には尙ほ更さうである。此の選擇は子供の天性の資質や性格について行ふことは出来ない。それ等は教育が終つてしまふまでは判らないのだが、私は子供が生れない前に教育をはじめからである。若し私にその選擇をさせるなら、私は私が假定した生徒のやうな普通の人間しか採用しない。教育の必要があるのは普通の人間だけだ。世間の普通の人の教育の模範として役立つのは、普通の人間の教育のみである。普通人以外の人は何をされようともそれには頓着なくひとりで成長してゆく。

國土は人間の教化に無關係ではない、人は氣候の溫暖な土地に於いてでなければ十分に發育しない。兩極地方に於ける不便は一見して明白だ。人は植木のやうに永久に一つ所に住んでゐるやうに植ゑつけられてゐるものではない。そして一方の極地を出發して他方の極地へ達せんとする人は、中間の地點から出發して前者と同一の地點に達せんとする人に比して二倍の距離を歩かねばならぬ。

溫帶の國の住民が代る代る熱帶或は寒帶へ行つて住まねばならぬ時は、彼の便利は更に顯著で

ある。何故かといへば、彼は熱帶から寒帶へ、或は寒帶から熱帶へ行く人と同様の變化を受けても、その自然の境遇から半分動くだけですむからである。フランス人はギネー島（オーストラリアの北方熱帯にある）やラポニー（スカンディナヴィヤ北方に位するヨオツバ最北の地）にも住むことが出来るが、アフリカの黒人はトルネヤ（スエーデン）にさへ住むことが出来ず、ロシア北部のサモア人はアフリカのあるやうに思はれる。黒人もラポニー人もヨオロッパ人のやうな進んだ知識をもつてゐない。それだから私は、私の生徒を地上に住まはせるなら、溫帶に住まはせたい。例へば、何處此處といふよりはさしづめフランスに住ませたい。

北國に於いては、人々は不毛の地で多量のものを消費し、南國に於いては人々は豐穰の地で少くしか消費しない。こゝから又新しい差異が生じ、前者の住民は勤勉となり、後者の住民は思索的となる。社會は同一の場處に於いてこれに髣髴たる對照を吾々に見せる。貧者と富者との別が即ちそれだ。貧者は不毛な土地の住民であり、富者は豐穰な國の住民である。

貧者には教育の必要がない。彼の境遇が彼に一の教育を強要し、他の教育を受けることを許さないのだ。これに反して富者がその境遇から受ける教育は、最も彼に不適當なものである。彼自身の爲めにも社會の爲めにも不適當なものである。ところで自然の教育は人間をあらゆる境遇に適當させるものでなければならぬ。しかるに、貧者を富ませようとする教育は、富者を貧乏にさせようとする教育よりも不合理である。何となれば貧者と富者との數に比して、貧乏人から成金になつた人よりも、金持から零落した者の方が多からである。それ故に私は教へる子供を富者から選ぶ。さうすれば少なくとも一人だけ眞實の人間を増したことになるのだ。貧者は自分の力

だけで立派に人となつてゆくのだから。

これと同じ理由によつて私はエミイルが身分の高い生れであつても介意はない。何となれば此れによりて一人の犠牲者が偏見から救はれることとなるのだから。

エミイルは孤兒である。彼に父母があつたところで、敢て關するところではない。私は彼の兩親の義務を果たすことを委託されてゐるかはり、彼の兩親の權利をも悉くうけついでゐるのだ。エミイルは彼の兩親を尊敬しなければならぬ。けれども彼は私以外の人に従つてはならない、これが私の第一の、といふよりも寧ろ唯一の條件である。

此の條件に私は今一つの條件を附加せねばならぬ。それは前者の條件と別のものではなくて、その附屬とも言ふべきものである。即ち相互の承諾の上でなければ、私達を別々に離してはならないといふことである。此の條件は極めて大切なものである。私は生徒と教師は互に一心同體であつて、一生の運命を共にすべきものだと考へて貰ひたい。彼等が互に遠く離別することを考へ、互に他人同志にならねばならぬ時を豫想すると同時に、彼等は既にその時から事實上さうなつてしまつてゐるのである。さうなると二人は互に偏頗な小城廓をつくつて、別々に離れる日のことばかり考へ、互に睨みあつて暮すやうになる。弟子は先生を看守か答としか思はなくなくなり、先生は弟子を厄介な重荷のやうに思つて、それから免れたがる。二人は期せずして、別々になるのを待ち焦れる。而して彼等の間にはもともと眞の愛著がないのだから、教師は弟子の世話をすることを怠り、生徒は教師に服従しなくなる。

しかしながら、彼等がその生涯を共にしなければならぬと思ふならば、彼等は何うしても互に愛し合はなければならぬ。かうして彼等は互に親しみを増してゆくのである。生徒は子供の時に、

彼が大人になつてからも依然一緒にゐる筈の友人の意見に従つても決して恥ではない。教師は、心をこめて子供を教育して置けばその果實は彼の收穫となるから彼自身の利益となり、彼がその生徒に與へた價値は全部彼の資本となつて彼の晩年に至つてそれを利用することが出来る。

だが前もつて此の約束をするには、その子供が安らかに分娩され、立派な體格をもつた、強壯にして健康な子供であるといふ條件が要る。神から與へられた家庭では父は決して選擇をするとは出来ない。又選り好みをしてはならぬのである。彼の子供は皆等しく彼の子供である。彼は自分の子供に對して何れにも同様の注意を拂ひ、同様の愛情をもたねばならぬ。自分の子供が不具者であらうとあるまいと、病身であらうと強壯であらうと、彼等は悉く彼に托されたものであるから、彼はやがてそれを彼に托した神の手に彼等を返さねばならぬ。結婚は配偶者間の契約であると同時に、又大自然との契約でもあるのである。

けれども自然から賦課されたのではない義務を、進んで身に負はうとする者は、豫めこれを遂行する手段を心得てゐなければならぬ。でないといふ自分の力で出来ないことまでも引き受けるやうなことになる。纖弱多病の生徒を預る人は、その職業を教師から看病人に變へてしまふやうなものだ。そして彼は可惜子供の生命の價値を増進する爲めに捧ぐべき時間を、病身な子供の無益な生命を保護することの爲めに消費してしまふのだ。他日その子供が死ぬと、彼は、涙に泣き濡れた母親が、こんなに早く息子が死ぬ筈ではなかつたと彼に怨言を述べて啣つのを聞かねばならぬ。その實彼が看病しなかつたらその子供は夙の昔に死んでゐるのだに。

私は病身な子供、虚弱な子供は、假令八十までその子供が生き延びるとしても預りたくない。私はいつも身體の保護にばかり没頭して、いつまでも彼自身にも他の人にも役に立たぬやうな人

を預るのは眞つ平だ。そんな子供の虚弱な身體は精神の教育に邪魔になるものである。たとひ此のやうな子供を教育するために無益に心勞を空費したとて、私に何が出来るものか。その爲めに社會の損失を二倍にするだけではないか。社會から、一人ですむ所を二人奪ふだけではないか。他の人が私の代りに此の弱い子供の世話をするといふなら、私はそれには滿腔の賛成を表する。そしてその人の慈善を賞讃する。だが私の才能はその任に堪へぬ。私は死ぬることを避けようとばかり考へてゐる人に生きることを教へる術を知らない。

身體は精神の命令に従ふためには十分強壯でなければならぬ。身體は精神の忠僕となる爲めには強壯なことが必要だ。無節制は情慾を刺激し、且つ徐々に身體を衰弱させる。禁慾や斷食等もそれと正反對の理由から屢々同様の結果を齎す。弱ければ弱い程身體は命令し、強ければ強い程服従する。一切の情慾は柔弱な身體に宿るものである。而して情慾はそれを満すことが出来なければ出来ない程募つてゆくのである。

虚弱な身體は精神を弱くする。そこで薬がはゞを利かすことになる。これが人間に非常な害を及ぼす。薬は病氣を癒すと言はれてゐるが、薬で癒さうとする一切の病氣の害よりも薬の害の方が人間には更に危険なのだ。私は、醫師が何んな病氣を治すか知らない。けれども私は醫師が更に危険な病氣を興へることを知つてゐる。卑怯、臆病、迷信、死の恐怖等の病氣が即ちそれだ。醫師は身體の病氣を治しても勇氣を殺してしまふ。醫師が屍骸を歩かせたところで吾々に何の益する所があるか？ 吾々に必要なのは人間なのだ。而して人間が醫師の手から生れてくるといふことは金輪際無い。

薬は今日吾々の間に大流行だ。それはその筈だ。薬は、仕事もせず、何うして時を費したらいい

いかも知らないで身體の保養ばかりに日を送つてゐる閑人の娛樂である。こんな連中が若し不幸にして不死の人と生れたら、彼等は此の上なく惨めなものであつたらう。死ぬ心算のない生命は彼等にとつて何等の價値もないであらう。こんな連中は醫師から威嚇したり慰めたりして貰つて、死なうといふ彼等にとつての唯一の快樂を毎日醫師から興へて貰ふことが必要なのだ。

私はこゝで薬の無効に就いて論及するつもりではない。私の目的は薬を服むことを精神的方面から考へて見るだけである。けれども私は人々が薬の使用に就いて、眞理の探究に就いてと同様の詭辯をしてゐることを見逃すことが出来ない。彼等は常に病人は薬を服ませれば治るもの、眞理は探究すれば發見されるものとばかり想像してゐる。彼等は醫師の力で全治した者一人に對し、醫師が殺した病者が百人もあることを平均する必要があるのを知らない。有益な眞理が一つ發見されるに對して、同時に無數の誤謬が禍を流すことを比較考量せねばならぬことを了解しない。眞理を教へる學問と病氣を癒す薬とはいづれも勿論甚だ結構である、けれども人を欺く學問と人を殺す薬とは悪い。この點をはつきり區別しなければならぬ。これが肝腎の問題なのだ。若し吾々が眞理を無視することが出来たなら、吾々は決して虚偽に欺かれなからう。又若し吾々が自然に逆つて病氣を治さうと思はなかつたなら、吾々は決して醫師の手で殺されることはないだらう。此の二つは控へるのが賢明な道だ。これに逆はないのが明かに得策だ。それだから私は薬が或る人に效があるか無いかを論ずることは止めて、大づかみに薬は全人類に有害だと言ふのである。

それは醫師の罪であつて、薬それ自身の效能は確實なものであると言ふ人があるかも知れない。これは絶えず聞くことである。これは尤も至極だ。それでは醫師の手を通さずに薬だけ貰ひたい

ものだ。何となれば醫師と薬とが一緒になると、醫師に病氣を治して貰ふといふ希望よりも百倍も多く醫師の過失誤謬を恐れねばならぬからだ。

肉體の病氣の爲めによりも寧ろ心の病氣の爲めに發明された此の虚偽の醫術は、最早や精神に對しても肉體に對しても不用である。それは吾々の病氣を癒すよりも寧ろ吾々に病氣に對する恐怖を印象させる。死を遠ざけるよりも寧ろ死を豫感させる。生命を延す代りにこれを喪へさす。而して若しこれが生命を延すとしてもそれは散々人類に害を與へた上での話だ。何となれば吾々は病氣の用心をする爲めに社會に出ることが出来なくなり、病氣の恐怖の爲めに吾々の義務を怠るやうになるからである。危険を怖れるのは危険を認識するからである。危険を知らないものは何者をも恐れない。ギリシヤの詩人はアキレスの身體を不死身にした爲めに彼の勇氣の價値を奪つてしまつた。アキレスの位置に代れば、誰だつてアキレスのやうになれるだらう。

眞の勇者を發見したいと思ふなら、醫師のゐない處に於いてそれを索めよ。人々が病氣の結果を知らない處に於いてそれを索めよ。人々が死を思はない處に於いてそれを索めよ。そこでは自然、人は斷えず苦しみ堪へて平和に死ぬことが出来る。人間の心を墮落させ、死を恐れさせるのは醫師の處方と學者の議論と僧侶の説教とである。

私には、これ等の人々を必要としない生徒を與へて貰ひたい。でなければ私は眞つ平だ。私は他人に仕事の妨害をされるのは嫌だ。私は獨りで彼を教育したい。でなければ手をひくばかりだ。醫學の研究に半生をさゝげた學者ロックは、病氣の豫防のためにも、些細な病氣の時にも、子供に薬を服ませるはいけないと飽くまで奨めた。私は更に進んで、私自身も決して醫師を招ばないし、我がエミールにも決して醫師を招ばないことを宣言する。少くも、エミールの生命が明かに

危険である時の外は醫師を招ばないことを宣言する。エミールの生命が明かに危篤である時には、醫師が診察を誤つても子供を殺すより悪いことになる筈がないからだ。

こんな風に醫師を招ぶことを延期すれば、醫師の方も都合がいゝだらうと私は思ふ。假令子供が死んでもそれは醫師を招ぶのが遅れたからといふことになる。若し子供が助かれば醫師が助けたといふことになる。かうして醫師には花を持たせてやるがいゝ。しかし最後の時まで醫師を招ばないことが何より大切だ。

子供は病氣をなほすことは知らないが、病氣の時にはどんな工合かといふことは知つてゐる。そこで一の治療法が他の治療法に代はつて来る。そしてその効果はより適確だ。これが自然の療法だ。動物が病氣にかゝつた時は、彼は黙つて苦痛を忍び、じつとしてゐる。だが人間のやうに憔悴した無活氣な動物はあまりない。神經過敏と恐怖と不安、特に藥劑が、助かる筈の病人、時がたてば治る筈の病人を何れだけ殺してしまつたかわからない。人間よりもよりよく自然に従つて生きてゐる動物は、人間よりも病氣にかゝることが少いといふ人があるだらう。その通りである。此の生活方法こそまぎれもなく私が私の生徒に與へようとする生活方法であるのだ。さうすれば私の生徒もかういふ生活方法から動物と同様の利益をうけるに相違ない。

醫學の中で唯一の有益な部門は衛生學である。而かも衛生學は科學といふよりも寧ろ道徳である。節制と勞働とは人類の眞の二つの醫者である。勞働は人間の食慾を増進し、節制は暴食を防ぐ。

何んな養生法が生命と健康とに對して最も有效であるかを知る爲めには、健康で強壯で長壽をする人々がどんな養生法を遵奉してゐるかを知れば澤山だ。若し一般的に觀察して薬を服んでも

少しも健康を増進せず一向長壽しないといふことがわかれば、それだけでも薬を服むといふことは無益であるばかりでなく有害だといふことになる。何となれば、まるで役にたゝぬことに時を費し、人と物とを浪費するからだ。生命を保存する爲めに過した時間は生命を耗り減らすために浪費されたのだから、この損失を生命から差し引かねばならぬ。そればかりでなく、此の時間が吾々を苦める爲めに用ひられる時は、それはまるまる空費されたよりも更に悪い。元々どころではなくて損なのだ。故に公平に計算する爲めには空費した時間だけ吾々の餘生から差し引かねばならぬ。醫師にかゝらずに十年生きた人は、彼自身にとつても他人にとつても醫師の厄介になつて三十年生きた人よりも多く生きたことになる。かやうに私はこれを兩方とも試みて見たから、誰よりもこれから結論をひき出す権利をもつてゐると考へる。

私が強壯にして健康な生徒を希望する理由、並に生徒を健康にする爲めの原則は以上の通りである。體格を強健にして健康を増進する爲めに、手工や體操が有益であるといふことに就いては、私は茲にくだくだしく證明すまい。これは何人も疑はないところだ。長壽をした人の例を見ると、殆んど十人が十人とも、最も好く運動し、最もよく疲労と勞働とに堪へた人である。(註一五)私は、私が如上の唯一の目的の爲めにどんな注意をするかといふ事の詳細にはこれ以上立ち入るまい。私が實際の教育を述べる時に此の事は大切な部分としてその中で是非述べられる筈だ。諸君はこれ以上の説明をしなくとも十分その意味だけはつかむことが出来るだらう。

(註一五) こゝにイギリスの新聞紙から引いたその一例を掲げる。それは此の問題に就いて熟考すべき多くのものを含んでゐるから私はこゝでそれを引用せざるを得ないのである。

「一六四七年に生れたバトリック・オニールといふ人が一七六〇年に七歳目の細書と結婚した。此の人はチャールズ二世の

治下の第十七年に精騎兵隊に入つて一七四〇年まで諸隊に轉任し同年賜暇の身となつた。彼はウイリアム三世王とマールボロ公との治下に行はれた戦役に悉く従軍した。此の人は普通のビール以外には酒は一滴も飲まなかつた。彼は野菜ばかりを常食として親族の者を招いて宴會を開く時の他は一切肉類を口にしなかつた。彼は常に彼の職務上やむを得ない時の外は日出と共に起床し、日没と共に就寢するのを習慣とした。彼は今年百十三歳で、而かも耳も遠くなく、至つて丈夫で、杖無しに歩行することが出来る。こんな高齢であるに拘らず、彼は東の國ものくらしてはゐない。日曜には常に彼の子、孫、曾孫と打連れて教會へ行つてゐる。」

人は生れながらにして慾望をもつてゐる。だから生れるとすぐから乳母が必要である。若し母達が進んでその義務を果せばそれに越したことはない。その場合には彼の女に色々の指圖を書いて與へるといふ。何となれば母親か子供を育てるといふ利益には缺點も伴ふからだ。即ち教師が生徒から多少離れるやうになるからだ。だが子供の利益を思ふ念と愛する子供を委託せんとする教師に對する尊敬の念とは、母親をして教師の意見に耳を傾けさせるであらうことも考へねばならぬ。而して母親がしようと思へば何をしても他の人よりよく爲るであらうことは確かである。けれども若し他人の乳母が是非必要であるなら、先づ第一にこれを充分選擇しなければならぬ。富める人々の不幸の一つは萬事に於いて欺かれることである。彼等に人間がよくわからないのは何も不思議でない。彼等を腐敗させるのはその富である。故にその當然の應報として彼等は彼等の知つてゐる唯一の道具の缺點を先づ第一に感じるのである。彼等にとつては彼等自身が行ふことの他は、一切萬事拙く行くのだ。而かも彼等は殆んど何も自分の手ではしない。乳母を探すがいゝ乳母となつてゐる。だから私はエミールの乳母を選むに就いては、産科醫には相談しない。私は自分でそれを選択する。私は産科醫のやうに乳母を巧みに説得することは出来ないかも知れ

ぬ。けれども私の方が確かにあてになる。産科醫が慾に目が昏む程には私は熱心に目が眩まないから。

乳母の選擇にはそんなに難しい秘傳があるわけではない。選擇の標準は世間によく知られてゐることだ。しかしながら私は世人は乳の質に同じく乳の年齢にも今少しく注意を拂はねばならぬではないかと思ふ。新しい乳は全く淡白である。それは殆んど、生れたばかりの子供の腸の中にある濃厚な大便の残物を下す爲めの飲料に過ぎないのだ。小兒の消化力が増すにつれて、乳は少しづつ濃厚となり、一層固體的の滋養物を供給するやうになつて来る。これは確かに、自然が乳兒の年齢が進むに従つて、凡ての動物の女性の乳の濃度を變へてゆくことによるのだ。

それ故に、生れたばかりの子供は子供を分娩したばかりの乳母から乳を貰はねばならぬ。これは面倒である、それは私も知つてゐる。しかしながら、自然の秩序の埒外に出てゐながら正しくやらうと思へば何事をしてでも面倒でないものはない。唯一の面倒の入らない手段は正しくやらうことだ。世人が選んでゐるのは此の手段だ。

乳母は身體と同じく心も健全でなければならぬ。情緒の不節制は體質の不節制とともに乳に影響することがある。且つ又肉體の健康だけに注意を局限するのは物の一半をしか見ないものである。乳母は悪人でも乳は良いことがあり得る。善良な性格は健康なる體格と同様に必要である。私は若し悪徳の婦人を乳母とすれば、彼女の女の悪徳がその養つてゐる子供に感染するだらうとは言はぬ。たゞ子供が彼女の女の悪徳の爲めに苦しむだらうと言ふのだ。乳母は子供に乳を與へるばかりでなく、熱心、忍耐、慈愛、清潔等を必要とする諸々の注意をも與へなければならぬのではないか？ 若し彼女の女が食ひ過ぎたり不衛生をしたりすれば、すぐに彼女の女の乳は悪くなるだらう。

若し彼の女が怠慢であつたり、怒りつぽかつたりすれば、その爲めに、彼の女に委された子供——自分の身を保護することも、不平を訴へることも出来ない不幸な子供はどうなるであらう？ いづれにもせよ悪い人間は何事にとつてもいゝことがない。

監督者以外に教師をもつてはならぬ如く、乳母以外に家政婦をもつてはならぬのだから、乳母の選定は益々重要なものとなつてくる。現代の人々よりも理窟は下手だが實行は遙かに賢明にやつた古代人は、さういふ習慣をもつてゐた。乳母は女の子供に乳を與へる役目がすんだ後でも決して子供から離れなかつた。古代の芝居で、忠義な女の大部分が乳母であつたのは即ちこの理由に基くのである。代る代る多くの異つた人の手に移されて育てられた子供は到底立派に教育される氣遣ひはない。乳母が變る度に、子供はひそかに前の乳母と後の乳母とを比較してやがて新しい乳母に對する尊敬を失ひ、その結果乳母の權威が失墜して来る。若し子供が自分より大して賢くない大人があるといふことを一度び信じたなら、年長者の權威は忽ち子供の心から消え失せ、子供の教育は臺なしになつてしまふ。子供は彼の父と母がない場合には乳母と教師以外に目上の人をもつてはならない。否な寧ろその中の一人で澤山である。けれどもそれが二人に分れるのは已むを得ない。その缺陷を償ふためにはせめて子供の管理に當る二人の男女が互に協心戮力して子供に對しては一人となるやうにせねばならぬ。

乳母はいま少し裕福な生活をする必要がある。いま少し滋養に富んだ食物をとらねばならぬ。けれども彼の女は急に生活の様式を變じてはならない。そのわけは、急に、しかもすつかり生活を變へるのは、悪い生活から、良い生活に變へるにしても、常に身體に危険だからである。のみならず、彼の女の普通の生活法でこれまで差支なく、寧ろそれで彼の女が健康になり、體格がよ

くなつてゐたものを、何を好んで變へる必要があらうか？
 田舎の女は都會の女よりも肉を食ふことが少く、野菜を食ふことが多い。此の菜食主義は女の爲にもその女が育てる子供の爲めにも、害を及ぼすより寧ろ有益であるやうに思はれる。かういふ女達がブルジョアの家庭の子供の乳母となると、養汁や肉汁は乳麩を良くし、乳を豊富にするといふので、養汁鍋を興へられる。私はこれとはまるで反對の意見を抱いてゐる。そして私は自分の経験によつて、こんな風にして育てられた子供は、さうでない子供よりも、腹痛や腹の蟲にかゝり易いことを知つてゐる。

これは毫も惟しむに足りない。何となれば腐敗した肉には蟲がわくが、植物性の食物はそんなことがないからである。乳は動物の體中で精製されるものだけれども、元來植物性のものである。

(註一六) 乳を分析して見ればそのことはわかる。即ち乳は容易く酸に變じ、そして動物質のやうに揮發性アルカリ(アンモニア)を生ずることなく、植物のやうに中性鹽を生ずる。

(註一七) 女は麵麩や野菜や乳製品を食ふ。犬や猫の雌も亦それらを食ふ。狼でさへも草を食ふ。それ故に此等のものには彼等の乳になる植物性の液があるのである。猶ほ肉類の他には何物も絶対に食ふことの出来ない種類の動物の乳もしらべて見ねばならぬ。しかしそんな動物があるかどうか私は疑問だと思ふ。

草食獸の雌の乳は肉食獸のそれよりも味がよく、且つ滋養に富んでゐる。その構成要素は同質であるけれども前者は後者よりもその性質を長く保存し、腐敗することが少ない。これを量の方面から見ると、澱粉が肉類よりも多く血液になることは萬人周知のことである。従つて又前者は後者よりも多くの乳になるに相違ない。私は植物性の食物ばかりで生きてゐた乳母の乳のみ、おそくまで断乳せず、断乳すると同時に植物性の滋養をとつてゐる子供が蟲にとりつかれるやう

なことは萬々ないと思ふ。

植物性の滋養物が乳を酸ばくしやすいといふことは或は有るかも知れぬ。しかしながら私は酸ばい乳が衛生上よくないものであるとは決して思はない。さういふ乳ばかりで養はれた人は多勢あるが皆非常に健康である。而して様々の吸入器は皆純然たるごまかし物だと思ふ。世の中にはまるで乳に適しない體質をもつた子供がある。かういふ場合には如何なる吸入器をもつても乳で育てることは出来ない。さうでない子供なら吸入器などはなくても乳を呑む。乳が水分と固形物と別々になつたり凝結したりするのを心配する人があるが、それは要らぬ心配である。抑々乳は胃の中へ入れば常に凝固するものであることは誰でも知つてゐる。乳はかくの如くにして人間の子供や動物の子供を養ふに十分である程固い滋養物となるのである。若し乳が少しも凝固しなかつたら、それは唯胃の中を通過するだけで滋養にはならぬだらう。(註一七) 乳を様々に調合したり、種々の飲料で薄くしたりするのは無駄なことだ。乳を呑むものなら乾酪を消化することも出来るのだ。これには例外がない。胃は乳を凝固させる爲めに巧みにつくられてゐる。あの凝乳劑は實に犢牛の胃からつくつたものである。

(註一七) 吾々の身體を養ふ養液は液體であるけれども、それは固體の養食物から搾り出されたものでなければならぬ。スープばかりで生きてゐる人が劇しい労働をすると速く疲れるが乳を飲んでゐる人は遙に長く労働に堪へることが出来る。それは乳が凝固するからだ。

それ故に私は、乳母の食物を平生の食物と變へる代りに彼の女に食物を澤山食べさせ、同じ種類の食物で品質をよく選擇すれば十分だと思ふ。野菜料理を食ふと便秘になるといふのは食物の性質によるのではない。食物を非衛生的にするのは、たゞその調理法次第だ。だから諸君は料理

法を改良して、ルー（乳脂を養汁にしたスープの一種）やフライ類を用ゐてはならぬ。バターや鹽や乾酪に火を通してはならぬ。水でうでた野菜は食事間際になるまで味をつけてはならぬ。野菜料理は乳母の健康を害するどころか、彼の女の乳を豊富にし、おまけにその質を良くするのである。（註一八）野菜料理が子供に良いことがわかつてゐるのに、肉類料理が乳母に良いといふやうなことが有り得ようか？ 事實はまるでその反対である。

（註一八）このピタゴラス式衛生法の利害得失を更に詳細に研究せんとする人はドクトル・コツキイ及びその論著ドクトル・ピアンキの、此の重要な問題に關する論文を参照されたい。

空氣は子供の體質に影響するものであるが、取りわけ人生の初期たる嬰兒時代にその影響は最も甚しい。柔軟な皮膚だと、空氣は凡ての氣孔から入りこんで、生れたばかりの嬰兒の肉體を強く刺戟し、そこに何時までも消え去らない影響を遺す。それだから、私は田舎から百姓女をつれ出して都會の部屋の中へ閉ぢ込め、子供の傍で子供に乳をのませるが、いふ意見には反對である。私は乳母に都會のわるい空氣を吸はせるよりも、子供を田舎へやつて良い空氣を吸はせるやうにしたい。子供にそこで新しい母親と同じ生活をさせ、彼の女の田舎風の簡素な家に住ませるのだ。そして教師もそこへついて行くのだ。讀者は、此の教師は金銭で儲つた人ではなくて、父親の友人であることをよく記憶してをる筈だ。しかしながら、此の友人が無い時は、又彼がそこへ移轉するのが容易でない時は、或は又私が勧めた事を少しも實行することが出来ぬ時は、その代りに如何したらいいのかと問ふ人があるだらう。私はそれは既に言つてしまつた。諸君のやつてゐる通りにはすばいゝのだ。さうなつて來ては最早や忠告する必要も何もありません。人は蟻の巢のやうに密集して住むやうには造られてゐない。彼等が開拓せねばならぬ土地の上

にばらばらになつて住むやうに造られてゐるのだ。人は群集すれば群集する程腐敗する。あまり多くの人がぎしぎし密集して住んでゐると、その結果肉體を虚弱にし、精神を墮落させること請合だ。人間は凡ての動物の中で最も群集生活に適しない動物である。人間が羊のやうに集團をなして生活してゐたら間もなく死滅してしまふだらう。一の人間の呼氣は他の人間にとつて致命的に有害である。此の場合致命的といふ言葉は比喩的にも文字通りにも眞である。

都會は人類を破滅に導く深淵である。多くの民族は幾代かの後には滅びるか或は衰頽してしまふ。これは復活されねばならぬ、而してこれを復活させるものは常に田舎である。故に、諸君の子供を田舎へ送つて、言はゞ自ら復活させ、人々の群集してゐる市街の悪い空氣の中で失つた元氣を、野原の眞ん中で取り返させよ。田舎に住んでゐる妊婦は都會へ歸つて分娩しようとする急ぐ。彼の女等はその反對のことをせねばならぬ筈なのだ。就中生れた子供を自分で養はうとする人はさうである。彼の女等は田舎にゐても決して思つた程後悔しないだらう。而して、人類にとつてより自然な田舎の生活に於いて、自然から與へられた義務を果して居れば、これに伴ふ愉快は、間もなく不自然な趣味を彼等の心中から一掃するであらう。

分娩後、先づ第一に人は子供を微温湯で産湯をつかはせる。それには通例葡萄酒を混ぜる。此の葡萄酒を混ぜることは私は全く不必要だと思ふ。自然は毫も酸酔性飲料を産しないから、人工的の酒類を使用することが自然の創造物の生命に大して重要なことであるとは信ぜられない。

それと同様の理由で、産湯の水を温めるのも不必要な注意である。而して實際に、或る國では生れたばかりの赤ん坊を遠慮なく河か若くは海で水浴させる處が澤山ある。けれども吾々の國の赤ん坊は、生れる前から父母に大切にされて既に身體が虚弱になつてゐるから、健康を回復する

爲めに必要なあらゆる試練を最初から受けさせてはいけない。子供に本来の力を回復させることは、徐々にやつて初めて出来るのであるから功を急いではならぬ。それだから、最初には世間の習慣に従ひ、少しづつそれから離れてゆくやうにせねばならぬ。子供には屢々沐浴させるがよい。彼等の不潔なことが沐浴の必要を示してゐる。沐浴をさせずに拭いてばかりやつてゐると子供の身體を痛める。けれど、子供が強くなつて来るにつれて、徐々に水の温度を低くし、遂には、夏も冬も冷水を浴びさせるやうにせよ。場合によれば凍つた水でも介意はない。しかし子供の健康を損はないやうに、水の温度を低くしてゆくことは極く緩漫に、継続的に、感知し難い位にやつてゆくことが肝腎である。だからその温度を正確に計るには寒暖計を使用するがよい。

此の沐浴の習慣が一度定められたら、これを中途でやめてはならぬ。一生それを守ることが必要である。私は單に一時的に子供の身體を清潔にし、健康にするといふ方面のみから斯く考へるのではなく、それと同時に筋肉組織を強くして、苦痛もなく、危険もなしに彼等を寒暑の變化に堪へさせるに極めて有効な健康法であるといふ點からも斯く考へるのである。その爲めに私は、人は成長の後には、少しづつ温度の異つた湯に浴し、時には堪へられるだけの熱湯に浴し、又屢屢堪へられるだけの色々な程度の冷水にも浴するやうにして欲しい。斯くの如く様々な温度の水に堪へるやうになつてしまへば、水は空氣よりも濃厚な液體であるから、吾々の皮膚に觸れる點が多く、吾々に刺戟を與ふことが大であるから、外氣の寒暖くらゐは殆んど感じなくなるであらう。

子供がこれまで彼の身體を包んでゐた母の胎内から出て呼吸するやうになつたら、最早や彼の肉體に別の窮屈な束縛を與へてはならぬ。頭巾や帯や襪襪で締めつけてはならぬ。四肢を自由に

運動させることが出来るやうに、ゆつたりとした、大きな産衣を着せるがよい。四肢の運動を妨げる程強く抑へつけたり、子供が外氣の刺戟を感じる事が出来ないほど暖くしたりしてはならぬ。(註一九)子供は大きな搖籃(註二〇)の中へ填物を十分詰めて、その中へ入れ、危険なく、容易に運動の出来るやうにしてやるがよい。子供に少し力がついて來たら、室の中を匍ひまはらせて置くがよい。子供の、小さい四肢を自由に發育させ、伸ばさせて置くがよい。さうすれば子供が一日一日と力を増してゆくのがわかる。此の子供を、襪襪でぐるぐるまいて育てられた同年輩の子供と比較すると、兩者の發育の顯著な相違に驚くだらう(註二一)。

(註一九) 都會では、子供は狭い室に閉ぢこめられたり、窮屈な着物を着せられたりして、窒息させられる。子供の世話をする人々は寒い空氣は決して子供の身體を暖くするものではなくて、その反對に子供を丈夫にするものであり、暖い空氣は子供を弱くして、熱をおこさせ、遂には子供の命を奪ふものであることを知らねばならぬ。

(註二〇) 私は、更によい用語がなからぬので「搖籃」といふ言葉をかつた。けれども私は子供を搖籃に入れることは決して必要なことでなく、且つ此の習慣は屢々子供に有害であると考へてゐる。

(註二一) 『古代のペルー人は子供に大きな産衣を着せて、その中で腕を自由に動かすことが出来るやうにして置いた。そして産衣を脱がせると、今度は地べたに穴を掘り、その中へ布をつめて、子供の下半身だけを穴の中へ入れ、兩手を自由にさせ、轉んだり怪我をしたりすることなく、彼等の欲するまゝに頭を動かし、身體を屈伸することが出来るやうにして置く。子供が一步でも歩き出すやうになると、母親は少し離れた所で乳房を見せ、これを誘惑物として嫌が厭でも子供が歩かねばならぬやうにしむける。此等の黒奴の子供は時としては乳を吸ふのに仲々骨を折らせられる。彼等は、その膝と足とで母親の片つ方の腰をかゝへ、母親の腕の助けを借りなくても離れないやうにしつかりと抱きつき、兩手で乳房を握つて、母親が何んなに動いても手を放しても落ちるやうなことなく、絶えず乳を吸つてゐるのである。而して母親は子供に乳房を吸はせたまゝ、常の如く自分の仕事をしてゐる。此の子供等は生後二月日には歩きはじめ。否な歩くとはいふよりも寧ろ膝と手とで這ふのである。此の練習を繰返してゐると、遂には、この姿勢でもつて、足で走ると同じ位の速さで走ること

が出来るやうになる。』(ピエツフオン『博物誌』第四卷一九二頁)
 ピエツフオン氏は以上の例に加ふるに、最近イギリスでは此の無用にして且つ野蠻な襁褓を用ゐる習慣が日と共に衰へてゐる事實を以つてすることが出来たであらう。尙ほ、ラ・ルウベエルの『シヤム旅行記』及びル・ボオ氏の『カナダ旅行記』等を参照せられたい。私はこのことを事實によつて確認する必要があるなら、二十頁位も抜きで埋めることが出来る。

それには乳母の側から大なる反對が生ずることを豫期しなければならぬ。乳母にとつては子供をよく縛りつけておいた方が、始終見張りをしてゐなければならぬのより骨が折れない。その上、着物が開いてゐると、身體の汚れが眼立つから、屢々洗つてやらねばならぬ。要するに習慣といふものが、或る國に於いては、凡ゆる階級の國民に喜ばれ、何人も論駁することの出来ない一の論據となつてゐるのだ。

決して乳母と議論をしてはならぬ。命令して乳母のすることを見てゐるがよい。そして十分意を拂つて諸君の出した命令を實行し易くするやうに心掛けるがよい。何故諸君がそれに與かつてはいけないのであるかといふと、普通に子供を育てる場合には人は肉體の方面のみしか氣を附けないから、子供が生きてゐて衰弱さへしなければその他のことはどうでも介意はない。併しこゝでは、生れると同時に教育が初まるのであつて、生れたばかりの赤ん坊も既に弟子である。尤もそれは教師の弟子ではなくて、自然の弟子である。家庭の教師はこの自然といふ最初の教師の下にあつて子供を導き、彼の教育が自然の教育に逆はないやうに注意さへすればよいのである。彼は子供を育て、子供を守りし、子供に従つて子供の微かな理解力の最初の光りを注意してゐるのである。丁度、回々教徒が月の四半分の現はれるのをみまもつてゐる月の出を知るやうに。吾々は生れながらにして物を學ぶ力を具へてゐる。しかし何も識らず、何もわかりはしない。

靈魂は不完全な、未完成な器官の中に閉ぢこめられて、自己の存在さへも自覺してゐない。生れたばかりの子供が手足を動かしたり、泣いたりするのは、知覺も意志もない純然たる機械的の運動である。

こゝに一人の子供があつて、生れながらにして大人のやうな體格と力をもつてをり、言はずジュピターの腦からパラスが出たやうに、母の胎内からすつかり出来上つて生れて來たと假定したなら、此の大人のやうな子供は純然たる白痴であるであらう。一個の自働機械に過ぎぬであらう。動くことも、感ずることさへも殆んど出来ない銅像のやうなものであらう。見ることも聞くことも出来ず、人を識別することも出来ず、見たいと思ふ方角へ眼を向けることも出来ないであらう。密に外界の事物を認識することが出来ないのみならず、感官でこれを知覺することも出来ないであらう。彼の眼には色は見えず、彼の耳には音は聞えず、物體に觸れても自分がそれに觸れてゐるといふことがわからないであらう。自分が物體をもつてゐてもそれすらわからないであらう。彼が何物に手を觸れてもそれは腦髓の中で手を觸れることになるであらう。彼の一切の感覺は唯だ一點に統合されるであらう。彼はたゞ『感覺中樞』としてのみ存在することになるであらう。彼は唯だ一つの觀念よりもつてゐないであらう。それは即ち自我 *moi* の觀念である。此の自我の觀念に彼は一切の感覺を結びつけるであらう。而して此の觀念、といふよりも寧ろ此の感情こそ、彼が通常の子供以上にもつてゐる唯一のものであらう。

此の俄か造りの大人は足で立つことも知らないであらう。足で立つて身體の平衡を維持することを學ぶにも彼は長い時間を要するであらう。恐らく彼はその稽古をもしないであらう。そして彼はその強い、頑丈な、大きな軀幹を右のやうにごろりと横たへたり、或は子犬のやうに俯ひま

はつてゐるであらう。

彼は自分が何を慾望してゐるかを知らず、またこれを満たす手段も知らないで、慾望の苦しみだけを感じるだらう。胃の筋肉と、腕や脚の筋肉との間には何等直接の關係がないから、こんな子供は食物が傍にあつてもこれに近づく爲めに歩くことも知らず、これを捉へる爲めに手を伸ばすことも知らないであらう。而して、彼の軀幹は既に成長し、四肢は十分に發育してゐるだらうから、その結果として、世間の子供のやうに始終じつとしてゐないで、身體を動かすやうなことはなく、食物を索めて動き出す前に、饑餓の爲めに死んでしまふであらう。吾々の知識發達の順序と段階に就いて、如何に考へたことが無い人でも、斯様な子供が、自己の經驗からも、仲間の人々からも、何も學ばない以前の人間が自然さうであるべき無知と愚昧の殆んど原始的狀態にあるといふことは、否定することは出来ない。

そこで、吾々は、各々の人が普通の理解力の段階に達する爲めの最初の出發點を知る、或は知ることが出来る。しかしながら、これと反對の極點を知つてゐる者があるだらうか？ 各人はその人の天賦の才、趣味、欲求、才能、熱心及びその人に與へられた機會によつて、その進歩に大小の差を生ずる。如何に大膽な哲學者と雖も、未だ一人類の到達し得る、而してそれ以上には進むことのできぬ限界」を指摘したのを私は聞いたことがない。吾々は自然が吾々に何れ程の能力を賦與してゐるかを知らない。何人も或る人と他の人との間に何れだけの距離があるかを測定した者は無い。時々その自尊心から、自分は最早や何處まで來たのか、まだ何れだけ進むことが出来るのか、自分の同輩は何故自分よりも先へ進んでゐるのかと考へて奮發しないやうな低劣な魂の持主が一人だつてあらうか？

私は繰り返す、人間の教育は生れると同時に初まるのである。物を言ふ以前、聞きわけける以前に、已に既に彼は教育されつゝあるのである。經驗は教訓に先だつ。子供が乳母の顔を見分けるとやうになつた時には、彼は既に多くの知識をもつてゐるのである。最も愚昧な人の場合でも、その人が生れてから成長する迄の知識の進歩の跡を尋ねて見たら、その餘りに顯著なのに吾々は驚愕するだらう。人間の全知識を凡ての人に共通の常識と、學者にのみ特有の知識との二つに分けると、後者は前者に比して言ふに足りない位微々たるものだ。けれども、一般人に共通の常識は知らず識らずの裡に、しかも大人になる以前に造られたものであり、且つ知識といふものは差異がある時にはじめて眼立つて來るものであり、代數の方程式のやうに兩者が等量である時は帳消しになつてしまふものであるから、吾々は殆んど此の萬人共通の知識には氣がつかないのである。

動物でさへも多くの知識を有つてゐる。動物は感覺をもつてゐるから、その使ひ方を學ばなければならぬ。彼等は慾望をもつてゐるから、これを満す術を學ばねばならぬ。即ち彼等は物を食ふこと、歩行すること、飛翔することを學ばねばならぬ。生れ落ちるとから足で立つてゐる四足獣も、初めは歩くことが出来ないのである。彼等が歩き出す時の様子は危つかしいものだ。籠から逃げ出したカナリヤは飛ぶことが出来ない。それは此のカナリヤはまだ飛んだことが無いからだ。生命を有し、感覺を有する生物にとつては何もかもが教育のお蔭である。若し植物が歩行運動をすることが出来たなら、植物にも感覺と知識とが必要であるに相違ない。さうでない植物は忽ち枯死してしまふだらう。

子供の最初の感覺は純然たる感情的のものである。彼等は快樂と苦痛とだけしか認知しない。

彼等は足で歩くことも、手で攫むことも出来ないから、外界の物を彼等に示すところの表象的感覚を少しづつ、つくつて行く爲めには可成り長い時間が要る。しかしながら此等の物が、言はゞ彼等の眼から離れて存在し、且つ此等の物が彼等にとつて一定の大きさと形とをもつて来るまでに、感情的感覚の反覆が、いつしか彼等を習慣の力に従はせるやうになるのである。子供の眼は絶えず光の方に向ふものである。而して、光が横からさし込むと、子供は知らず識らずその方向を向くものである。それだから、子供に斜視即ち物をはすかきに見る習慣をつけさせないやうに、日光のさす方向へ面を向けさせるやうに注意せねばならぬ。又子供には早くから暗に慣れさせるやうにしなければならぬ。さうしないと彼等は暗い處へ這入ると直ぐに泣いたり叫んだりするやうになる。又食事と睡眠も、餘りきちんと定められると、一定の時間を置いて必ず必要となつて来る、すると間もなくその欲望は自然の要求からではなく習慣から来るやうになる、といふよりも寧ろ、習慣によつて、自然の慾望に今一つの新しい慾望が附加されるやうになる。此等の點は深く警戒しなければならぬ。

唯一つ子供に是非つけさせねばならぬ習慣は、如何なる習慣にも感染しないといふ習慣だ。一方の腕ばかりをとつて連れて歩いてはならぬ。一方の手ばかりを前へ差し出したり、一方の手ばかり餘計に使つたりする習慣をつけさせてはならぬ。食事、睡眠、運動等の欲求が一定の時にでなければ起らぬ習慣や、晝夜の別なく獨りであることの出来ないやうな習慣をつけさせてはならぬ。彼の身體を自然の習慣に放任して、常に自分で自分を支配することの出来る状態に置き、子供に意志が出来たら、何事につけても彼の意志を貫徹させるやうにして、彼の自由を飽くまで發揮させ、彼の力を十分用ゐさせるやう、早くから準備してやるがよい。

子供が物の區別を見分け初めるやうになれば、子供に見せるものを選択することが肝腎である。兎角新しい事物は何に限らず人間の興味を惹くのが自然だ。子供は自分を非常に弱いものと思つてゐるから、知らない物は何でも怖れる。新しい事物を見ても、それに心を動かされない習慣をつけければ此の恐怖は消えてしまふ。綺麗な家で育てられた子供は、蜘蛛を見慣れないから蜘蛛を怖れる。そして此の恐怖は往々にして大人になつても去らない。ところが百姓には、男でも女でも子供でも、蜘蛛などを怖れる者は一人だつてゐない。

斯くの如く子供に見せるもの、選擇一つで子供が臆病になつたり勇敢になつたりするものだとすれば、子供の教育は、子供が物を言つたり聞いたりすることの出来るやうになる以前に始めねばならぬではないか？ 私は世人が子供に新奇なものや、醜い、厭はしい、珍奇な色々の動物等を努めて見せることをのぞむ。しかし始めは少しづつ遠くから見せ、徐々にそれに慣らして、やがて人がそれを手にとつて見せ、遂には子供が自分で手にとつて見るやうにさせたいものである。若し子供の時に、藁や、蛇や、蟹を見て怖がらない子供なら、大人になつてからは、何んな動物を見ても恐れないだらう。毎日怖しい物を見なれてゐるものには怖ろしいものはないのである。

子供は凡て假面を怖がる。私は先づエミールに面白い顔をした假面を見せる。次に彼の前で誰かに此の假面を顔に着けさせて見せる。私は笑ひ出す。皆の者も笑ふ。するとエミールも亦皆について笑つて来る。そこで私は少しづつ彼に嫌な假面を見せ、次には怖ろしいのを見せる。若し此の順序がうまく行けば、子供は最後の怖ろしい假面を見ても、怖がるどころでなく、最初の面白い假面を見たときと同じやうに笑ふだらう。斯うなつてしまへば何の様な假面で彼を感嘆しても、大丈夫だ。

アンドロマックとヘクトールとの離別の場でヘクトールの息子のアステアナクスは父親の兜の上にゆらいでゐる羽飾りを見て怖がり、それが父親だといふことがわからなくて泣きながら母親の胸に抱きつく。母親のアンドロマックは胸がせまつて涙ながらに笑つて見せる。此のやうな恐怖を無くするには何うしたらいいだらうか？ 明にヘクトールのやつたやうに、兜を地上に脱ぎ棄て、それから子供を抱いてやるがいい。しかしこんなに切迫つまつた場合でない普通の時には、それだけではいけない。若し女の手でヘクトールの甲冑をさはつてもよいのなら、先づ乳母がその兜に近附いて、羽飾りをさはり、子供にもそれをさはらせ、遂には乳母が兜をとつて笑ひながら自分の頭へ載せて見せるがいい。

エミールを鐵砲の音に慣らさうと思へば、私は先づ短銃の中で口火を燃やして見せる。此の火花ぐらゐの光なら、子供は喜んで見てゐる。私はこれを繰り返してゆく中に徐々に火薬の量を増してゆく。その中に填板をとつて少しづつ、彈藥をつめ、だんだんと大きな彈藥にしてゆく、さうして、遂には私はエミールを小銃の音にも、小白砲の音にも、大砲の音にも、最も高音の爆音にも驚かないやうに慣らしてゆく。

子供は、雷鳴が非常に凄くて、聽覺器官が實際に傷けられない限り、殆んど雷を怖れることはないといふことに私は氣が附いた。さうでない限りは、子供は雷が人を傷けたり、時としては人を殺すものであるといふことを知るに及んで初めてこれを怖れ出すのである。此のやうに理性が子供に恐怖を植ゑつけるやうになつたら、習慣で子供の勇氣を取り返してやらねばならぬ。徐々に、秩序をたて、慣らしてゆけば、大人でも子供でも、何物にも怖れないやうになる。

記憶や想像がまだ活動をはじめない人生の初期に於いては、子供は、現在彼の感覺を刺戟する

ものにしかな注意を拂はない。子供の感覺は彼の知識の最初の材料であるから、これを適當な順序で彼に與へてやらねばならぬ。そしてその記憶によつて彼が他日これを彼の悟性に同様の順序で提供するやうにしてやらねばならぬ。しかしながら子供は感覺のみにしか注意を拂はないから、最初の中は、此の感覺と此の感覺を起させる物との關係をはつきりと示してやれば十分である。子供は何でもかでも觸つて見たがる。手にとつて見たがる。子供の此の慾望を妨げてはいけない。此の慾望が子供には至つて大切な修業となるのだから。此のやうに子供は、眼で見たり、手で觸つたり、耳で聽いたり、取りわけ視覺と觸覺とを比較し、指で觸つて得た感覺を眼で秤量することによつて、色々な物の熱さ、冷たさ、堅さ、柔かさ、重さ、輕さを感知し、その大きさや形、その他感知し得る此等の物の一切の性質を判斷することを學ぶのである(註二二)。

(註二二) 嗅覺は子供の凡ゆる感覺の中で一番後から発達するものである。二歳或は三歳になるまでは子供は美臭も惡臭も嗅ぎ分けることが出来ないやうである。此の點に於いて子供は多くの動物に見るが如く、無關係である、否な寧ろ無感である。

吾々が吾々以外の物の存在を知るのは運動によつてに他ならぬ。又吾々が空間(延長)の觀念を獲得するのも吾々自らの運動によつてに他ならぬ。子供が手の届く所にある物に對しても、百歩も離れてゐる所にある物に對しても、一樣に見境なくこれをつかまうとして手を伸すのは、子供が此の空間の觀念をもつてゐないからである。この努力を大人は子供の我儘の微候だと勘違ひする。子供が物に自分の傍へ寄つて來いといふか、諸君にそれを持つて來て呉れとせがむ命令だと思ふ。ところがこれは決してそんなものではない。子供には最初或る物が腦に映じ、次に此の同じものが網膜に映じ、遂には自分の手の届く所にあるやうに見えるのである。子供には手の届

く所だけしか空間といふものが想像出来ないものである。それ故に、屢々子供を甲の場所から乙の場所へつれてゆき、子供に距離を判断することを教へる爲めに、場所の變化を感知させてやるやうに氣を着けねばならぬ。子供が距離を認知し始めたら、方法を變へて、子供の欲する時には子供をつれて行つてやらずに、諸君がつれて行つてやらうと思ふ時にだけ子供をつれて行つてやるやうにする必要がある。といふ譯は、子供がもはや感覺に欺かれないうやうになつて來ると、彼がそこへ行きたがつて努力するには、以前とは異つた動機があるのだからである。此の變化は注意すべきものであるから、もう少し説明しておかねばならぬ。

子供の心に慾望が起つてそれを満足したいと苛々してゐる時にはその徴候が外部に現れる。その時には外部からの助けを要求して子供は泣くのである。子供はよく泣く、それは無理もないのである。子供の感覺は皆感情的なものばかりであるから、愉快な感覺をうけると黙つてそれを楽しんでゐるが、不愉快な感覺を受けると、彼等獨特の言葉でそれを訴へて慰撫を求めするのである。このやうに眼を覺してゐる間は子供は無關心の状態でじつとしてゐることは殆んど出来ない。子供は眠つてゐるか、でなければ色々のことを感じてゐるのである。

吾々の一切の言語は人爲によつて出來たものである。凡ゆる人類に共通な自然の言語はないものであるかと長い間研究されて來た。ところが、それが疑ひもなく一つある。それはものを言ふことの出來ない以前に子供の語る言語である。この言語は發音法にはかなつてゐない。しかし抑揚はついてゐる。耳に聞く事も出來れば、意味もわかる。吾々は大人の言語ばかり使つてゐるので、子供の言語の意味は殆んど忘れてしまつてゐるが、子供をよく研究すると、子供の傍にいれば子供の言葉が再びわかるやうになつて來る。此の言葉は乳母に訊いて見ればよく知つてゐる。

乳母は子供の言ふことを悉く聞きわけて、それに返事をし、随分長い間子供と對話をしてゐる。此の場合乳母は言葉を使ふけれども、この言葉はまるで不必要なのだ、子供は言葉の意味を聞くのではなくて、言葉の抑揚を聞くのだ。

聲で發する言葉で話をすると共に、子供は身振でも話をする。此の身振でする話は言葉でする話に劣らず活潑に行はれる。これは子供の纖弱い手で行はれるものではなくて、その聲で行はれる。此のまだ十分に整つてゐない顔で、子供が如何に多くの表情をするかは驚くべきものがある。子供の顔つきは刻々に殆んど認知し難い速さで變つてゆく。微笑や慾望や恐怖やが電光のやうに生じたり消えたりする。その都度諸君はまるで別の顔を見るやうな氣がするのである。確かに子供の顔面筋肉は大人のそれよりもよく動く。その代りに、子供のどんよりした眼は殆んど何も語らない。これはまだ肉體的慾望だけしかもたない年齢に於ける子供の一種の特徴であるに相違ない。顔つきは感覺を現はし、目つきは情操を現はすものだ。

人間の最初の状態は窮乏と弱さとだから、人間が最初に發する聲は不平と泣聲とである。子供は慾望を感じるけれどもこれを満足させる術を知らない。そこで彼は泣いて他人の助けを求め、餓ゑても泣く。渴いても泣く。寒すぎても泣けば、暑すぎても泣く。動きたいときにじつとさして置いても泣けば、睡いときにゆすぶつても泣く。子供は身體のたゞずまひが氣に入らなければ氣にいらぬでそれを變へて欲しがる。子供の言葉はたゞ一つしか無い。それは子供には、言はば、不愉快といふことがたゞ一種しかないからだ。五官の發育はまだ不完全であるから、子供は種々の印象を判別することが出來ない。そこで何でも工合の悪いことは凡て子供には悲しみの感覺となるのである。

此の泣き聲を世人は殆んど注意する價值がないと思つてゐるが、これから、人間とその一切の環境との間の關係が生れる。こゝに社會の秩序を形成する長い連鎖の第一環が鑄造されるのである。

子供が泣く時にはどこか工合が悪いのだ。何か満すことの出来ない慾望をもつてゐるのだ。そこで世人はこの時にはそれをよくしらべて探して此の慾望が何であるかを見出し、それを満足させてやるが、若し子供の慾望が何であるかわからなかつたり、或はそれを満してやる事が出来なかつたりする場合には子供は仲々泣き止まない。そこで泣聲がうるさくなるものだから、人々は子供を黙らせようと思つてたらしたりすかしたりする。搖籃へ入れて揺ぶつたり、眠らせようと思つて歌をうたつたりする。子供があまり執拗く泣き續けると、人々は疳癩を起して脅しつける。無慈悲な乳母だと時々子供を打つ。人生の入口の閾を跨がうとしてゐる子供にとつてこれは又何たる風變りな教訓だらう！

私は此のやうに煩さく泣いてゐる子供が乳母に打たれてゐるのを見たことがあるが、この記憶はいつまでも忘れられないだらう。その時にその子供はいきなり黙つてしまつた。私は此の子供が打たれて怖ぢけづいたのだと思つた。そして心の中で、此の子供は卑怯な奴だから嚴格に脅しつけてやらねば利き目がないのだらうと思つてゐた。ところが私の考へは間違つてゐた。その不幸な子供は怒りで物が言へなくなつたのだつた。息がつまつたのだつた。子供の顔は紫色になつてゐた。暫くすると焼きつくやうに鋭く泣き出した。その泣き聲の中には、これ位ゐる年頃の子供の感じ得る怨恨と憤怒と絶望とが悉く含まれてゐたのだ。私はそのまゝその子供の息が絶えてしまひはしないかと心配した。他日、正義と不正との觀念は人間の心に先天的に備はつてゐるも

のか否かと疑はしくなるやうなことがあつた場合には、私は此の一例だけでもそれを信ずることが出来るだらう。私は確信する。火のついてゐる燃えさしが、偶然に此の子供の手の上に落ちたとしても、此の打擲程には――明かに彼を傷けようとする意志によつて打たれた此のちよつとした打擲程には、子供は感じなかつたであらう。

此の子供が怒つたり、ふくれたり腹を立てたりする性質には餘程注意しなければならぬ。ポエルハーヴェは、子供の病氣の大部分は痙攣性のものだと言つた。これは何故かと言ふと、子供の頭は大人の頭よりも比較的大きく、神経系が萬遍無くひろがつてゐるので、神経が昂奮し易いからであるとのことである。それだから、子供をいらさせたり怒らせたり、腹を立てさせたりする僕婢を子供の傍へ近附けないやうに十分注意せねばならぬ。これは子供にとつては外氣の變化の害よりも百倍も危険なもの、恐ろしいものである。子供は幾ら外部の物の抵抗を受けても、人間の意志の抵抗を受けなければ、決して疳癩を起したり、怒つたりしない。そして丈夫に成長してゆくものである。自由に氣儘に育てられた貧家の子供が、始終子供の意志に逆らつて手を盡して大切に育てられたと思はれてゐる良家の子供に比して、概して、強壯で頑健な理由の一つはこの點にあるのだ。しかしながら子供に従ふといふことゝ、子供に逆らはないといふことゝは全然別だといふことを常に忘れてはならない。

子供の最初の泣聲は願ひである。このことをよく注意しないと此の願ひは忽ち命令に變化する。子供等は最初の中は助けを求めが、終には服従を要求する。斯くて生れつき無力な子供の心中には先づ他人を頼りにする念が生れるのだが、それが終には命令、支配の觀念を生むに至るのである。とは言へ、此の觀念は子供自らの必要によつてよりも、大人が子供に服従することによつ

て助長される。そこで吾々は初めて、自然を直接の原因としない精神的結果を見るのだ。これをもつて見ても、幼い時から、子供の身振りや泣き聲に何のやうな秘密な意志が含まれてゐるかを察してやることが何故大切だかがわかる。

子供が何も言はずに手を伸ばさうとする時には、彼は物を攫まらうと思つてゐるのだ、それはその物迄の距離がわからないからだ。彼は思ひ違ひをしてゐるのだ。しかし彼が手を伸ばしながら、泣いて訴へる時には、も早や子供は距離を思ひ違ひをしてゐるのではなくて、その物に近附いて来いと命令してゐるか、さもなければ、諸君にそれを持つて来いと命令してゐるのだ。第一の場合には彼を徐々に少しづつその物の方へつれていつてやるがよい。第二の場合には子供の泣き聲が聞えない風をしてゐるがよい。泣けば泣く程聞えない風をするがよい。早くから、子供に、人間にも物にも命令をしない習慣をつけてやるのが大切である。何となれば彼は大人の主人ではないから、又物は彼の言ふことを解しないからだ。だから、若し子供が見た物を欲しがるときに、それを與へてやらうと思ふならば、その物を彼に持つて行つてやるよりも、彼をその物の方へつれて行つてやる方がよい。さうすれば彼は此の行爲からその年齢に相當な結論をひき出す。この外には、子供にそれを知らせる手段はない。

アベ・ド・サン・ピエールは人間を大きな子供と呼んだが、それを逆にして子供を小さい大人と呼んでもよい。此の言葉は箴言として眞理をもつてゐるが、原則としては説明の必要がある。だがホップスが悪人は強い子供であると言つたのは、全然矛盾してゐる。一切の悪は弱いことから生ずるものだ。子供は弱くなければ悪くない。強くしてやれば善くなる。何事でも出来る人は決して悪い事をする筈がない。全能の神の凡ゆる屬性の中で、善は最も本質的のものだ。善を離れ

て神は考へられない。善悪の二つを知つてゐた人民は悉く、悪を善より劣つたものと見た。さうでなかつたなら彼等の考へは不合理極まるものであつただらう。後に述べるサヴァア司祭の信仰告白を見るがよい。

理性のみが吾々に善悪を教へる。善を愛し悪を憎む良心は、理性とは獨立のものではあるが、理性無しに發達しない。理性の出来ない前にも吾々は自分で氣がつかずに善を行つたり悪を行つたりする。けれどもかゝる行爲には決して道德的意味はないのである、但し吾々に對する他人の行爲に就いて吾々が抱く感情には時とすると道德的意味があることがある。子供は目に觸れるものは何でもかでもかき廻したがる。手の届く物は手あたり次第に壊したり砕いたりする。まるで石でもつかまへるやうに鳥をつかまへ、自分で何をしたかも知らずにそれを絞め殺す。

それは、一體何故だらうか？ 先づ第一に哲學は、人間天性の惡、即ち、倨傲だとか、權力慾だとか、我儘だとか、意地悪とかいふものでこれを説明しようとする。更に哲學はそれに附け加へて、子供は自分が弱いといふことを意識してゐるから、強がりをやつて吾と吾が力をためして見たがるのだといふことも出来るだらう。しかしながらよほよほに衰弱して人生の下り坂にかゝつて、子供のやうに弱くなつてゐる老人を見よ。かゝる老人は單に自分がじつと溫和なしくしてゐるばかりでなく、自分の周囲のものまでも靜かにさせたがる、さうして一寸した變化をも厭つて不安を感じる。世界中が靜かになるのを望んでゐる。若し最初の原因に變りがないとすれば、年齢の相異によつて、どうして同じ感情と結びついた同じ弱いといふことから、斯くも異つた結果が生ずるのだらうか？ そして若し此の原因の相異が兩者の肉體的の條件にあるのでないとすれば、それは何處に求めることが出来るだらうか？ 兩者に共通な活動力が子供の場合には發育し、老

人の場合には消えてゆくのである。子供は造られてゆき、老人は壊されてゆく。子供は生に向ひ、老人は死に向ふ。老人の衰へ行く活動力は内部に集中し、子供の溢るゝ活動力は外部に擴がる。子供は、言はゞ、周囲の凡てのものを活かすに足る程十分に生を感得してゐるのである。造るのも壊すのも子供には同じなのだ。物の状態を變へさへすればそれでいゝのだ。變化は凡て活動だからである。子供が破壊を好むやうに見えるのは、悪意があるからではない。建設的活動はまだつこいが、破壊的活動は手つ取り速いので子供の活潑な性質により適してゐるからだ。

造物主は子供に此の活動力を與へたと同時に、あまり害を及ぼさないやうに注意して、これを驅使する力を少しゝか與へない。しかしながら子供等が、自分の周囲の人間を勝手に動かすことの出来る道具だと考へるやうになるや否や、彼等は周囲の人々に自分の欲することをさせて、自分の天性の弱さを補ふために彼等を使ふやうになる。子供が無精になつたり、我儘になつたり、強情つ張りになつたり、ひねくれたり、手におへなくなつたりするのはその爲めだ。これは子供の天性の權力慾から發達したものでなく、却つて人が子供に與へたものだ。何となれば、他人の手で活動し、舌を動かすだけで世界を動かすことが如何に愉快なものであるかを知るには、そんなに長い經驗は要らないからだ。

成長するにつれて人は力を得て来る。力が出来てくるとだんだん動きまはらなくなり、落ちついて、益々自己の中に閉ぢこもるやうになる。言はゞ精神と肉體とが平衡状態をとるやうになつて来る。そして自然は吾々の生命を維持するに必要なだけの運動しか要求しなくなる。しかしながら支配命令の慾望は、此の慾望を生んだ必要がなくなつても減びてしまはない。そこで我が儘が眼ざめて自尊心にこびて来る。それから習慣がこれを強める。かうして必要が氣紛れにかはり、

偏見と片意地とが最初の根を下して来るのである。

一度此の原理がわかれば、吾々は人が自然の道から外れて来る出發點をはつきりと見る事が出来る。次に吾々が自然の道から外れないやうにするにはどうしたらいゝかを見よう。

子供は有り餘る無用な力などはもつてゐないのである。それどころか、自然が彼等に要求するものを悉く満すだけの力さへももつてゐないのである。それ故に自然が子供に與へた力は全部これを子供に使はせなければならぬ。それでも彼等は決してこれを濫用する氣遣ひはない。これが第一の格律である。

子供の肉體上の慾望に關しては、知力的にも體力的にも彼等の足りない所を助け、補つてやらねばならぬ。これが第二の格律である。

子供を助けてやるのは實際その助けが有用な場合だけに限らねばならぬ。子供のむら氣を満足させてやつたり、理由のない慾望を満してやつてはならぬ。何故かといへば、むら氣は自然にそなはつて居るものではないから、諸君がそれを子供の心に起させさへしなければ、子供はそれに惱まされるものではないからだ。これが第三の格律である。

注意深く子供の言語や動作を研究せねばならぬ。さうすれば、まだ他人を欺くことの出来ない年齢にある彼等の慾望の中で、直接自然から發したものと我儘から生れたものとを見分ける事が出来る。これが第四の格律である。

右に列擧した格律の精神は、子供により多く眞の自由を與へ、權力をより少くしか與へないことにある。彼等をより多く獨立放任させて、より少なく他人の助けを借りるやうにさせることにある。斯くの如く幼時から子供の慾望を彼等の力相應に制限する習慣をつけてやれば、彼等は自

己の力の及ばないものを欲しがらうとは感じなくなるだらう。それ故に此のことは又、子供の身體や四肢を絶対に自由にさせて、單に轉ぶ危険のないやうにだけ注意し、子供の手を傷つける恐れのあるものを遠ざけてさへ置けばいふことに對する、新たな、又重要な理由となるのだ。

身體や腕を自由にさせて置かれた子供は、襁褓の中にくるまれてゐる子供よりも泣かないこと請け合である。肉體的の慾望だけしか知らない子供は、痛い時だけしか泣かない。さうなると大變都合がいふ。何となれば、さうなれば子供が助けを求めてゐることがすぐわかり、助けてやることのできる場合は早速助けてやること出来るからだ。しかしながら、若し諸君がその痛みをとめてやることが出来ない時は、そつとして置くがいふ。あやしたり、なだめたりしない方がいふ。諸君がいくら慰めてやつたところで痛みはなをりはしないのだ。それにひきかへ子供は何うしたらあやして貰へるかといふことを記憶えて来る。若し一度子供が諸君を意のままにする術を知つて来ると、彼は忽ち諸君の主人となり、教育はすつかり水泡に歸してしまふ。

子供の運動を邪魔しなければしない程彼等は泣かなくなり、子供の泣聲に惱まされることが少くなればなる程、子供を泣きやませる爲めにあやす面倒が少くなる。威嚇したり、あやしたりすることが少くなれば、子供は物事にびくびくしなくなり、我儘でなくなり、それだけ自然のままの姿を保持してゐることになる。子供を泣くまゝに放任しておくよりも、これを黙らせようとする方が却つて子供を脱腸にかゝらせ易い。私の経験によると放任して育てられた子供には脱腸患者が少い。しかしそれだから子供を構ひつけてはならぬといふのでは決してない。それどころか私はよく子供に氣をつけて、子供が泣いて慾望を訴へるまでそれを知らずにゐたりせぬことが肝

腎だと思つてゐる。たゞよく考へもしないで、無暗と子供を大事にするのがいけないといふまでだ。泣きさへすれば色々なことがして貰へることがわかれば子供が泣くのはあたりまへではないか？ 泣けばそれだけ報酬があるといふことを子供が知つてしまへば、子供はさうやすやすとは泣き止まない。そして終には子供はつけ上つて何をしても泣きやまなくなる。その時は子供は自分で泣きくたびれてやつと黙つてくるのである。

子供が窮屈な爲めでもなければ病氣の爲めでもなく、又何か不足がある爲めでもないのに長く泣くのは、たゞ習慣と強情との爲めだ。これは自然が泣かせるのではなくて、乳母が泣かせるのだ。乳母が泣聲の煩さいのに辛抱しきれないで、今日子供を黙らせると明日は子供はもつとうるさく泣くものだといふことを知らずに、だんだんと子供の泣くの増長させるからだ。

此の習慣を矯正し、これを豫防する唯一の手段はいくら子供が泣いても知らん顔して放つておくことだ。誰だつて無益な骨折を好んでする者はない。子供だつて同じことだ。最初は子供は強情を張つて、何時までも泣くだらう。しかし諸君の忍耐が子供の強情に打ち勝てば、子供の方でも張合が抜けてもう泣かなくなる。かうしてゆけば子供は泣かないやうになる、苦痛の爲めに自然に泣く時以外には泣かない習慣がついてくる。

その外に未だ、子供が我儘や強情で泣く時に、いつ迄も泣いてゐるのを防ぐ確實な方法がある。それは、何か愉快な或は珍らしい物をもつて子供の心を紛らし、泣かうとする意志を忘れさしてしまふことである。多くの乳母は、仲々このやり方に長じてゐる。そして上手にやれば此の方法は仲々効果がある。しかしそれに就いて最も大切なことは、諸君が子供の心を紛らさうとしてゐることを子供に氣附かれないやうにし、諸君が子供のことに氣を配つてゐるといふことを子供に

考へさせずに、子供が獨りで楽しむやうにさせることである。ところがこの點になると世間の乳母は皆下手だ。

世間の人は餘り早くから子供に乳離れさせ過ぎる。乳離れさせるべき時期は子供に齒が生え出した時とすればいい。一體齒の生える時は子供は痛みや苦しみを感ずるものだ。その頃になると子供は機械的本能で、何でも手に觸れたものを屢々口へもつて来て、これを噛まうとするものだ。そこで世間の人は齒の發育を助けようと思つて、象牙や狼齒のやうな堅いものを玩具としてあげがふ。しかし私はこれは間違ひだと思ふ。堅いものを齒齦にあてがつたところで齒齦が柔くなりはしない。それどころかそんなことをすれば却つて齒齦が硬くなつて齒の生えるのが益々苦しくなり、痛みが増すばかりだ。何でも自然の本能に見ならふのが一番だ。犬の兒は決して生えたばかりの齒で小石や鐵や骨などを噛みはしない。木や草や襤褸片のやうな、柔い、曲がりやすい、そして齒の痕のつくものを噛んで齒を慣らす。

世間の人は今では何事に就いても質素といふことを知らない。子供の身のまはりのものに就いてもさうだ。銀や金の鈴だとか、珊瑚珠や、切子水晶でこしらへた、値段の高い、色々な玩具を子供にあてがふ。こんな無駄な、而かも有害なことがあらうか！ こんなものは少しも要らないのだ。鳴物も玩具も更に必要はないのだ。果實や葉のついた樹の小枝だとか、がらがら種子の鳴る罌粟の果だとか、汁を吸つたり噛んだりすることの出来る甘草の根などは、贅澤な玩具に劣らず子供の慰みとなるだらう。そしてこんなものをあてがつて置けば幼時から子供に贅澤な習慣をつけるやうな不都合は生じないので。

麵麩粥(麥粉と牛乳と湯と)は餘り衛生上よくない食物だとされてゐる。煮た乳や、生の麥粉は不消

化物で胃に適しない。麥粉は麵麩粥にすると麵麩にしたよりもよく煮えて居ないし又酸酵もしてゐない。それだから私はバナード(パンを牛乳で溶いた粥)か米粥の方がいゝと思ふ。若し何うしても麵麩粥にしたいと思ふなら、前もつて麥粉を少し火にあて、焦した方がよい。私の國では、こんな風に焙つた麥粉をつかつて、非常に美味な衛生的な麵麩粥をこしらへてゐる。肉のスープやポタージュもまたあまり感服出来ないから成るべくつかはないやうにせねばならぬ。先づ子供を噛むことに熟らすのが肝腎だ。これは齒の發育を促す眞の方法である。子供が嚙下することが出来るやうになると唾液が食物に混つて消化を助けることになる。

だから私は先づ子供に乾果の類や、麵麩の硬皮を噛ませようと思ふ。私は彼等に玩具として硬麵麩の小さい棒や、ピエモン麵麩のやうなビスケットを與へる。私の國ではこれをグリッスと言つてゐる。口の中で此の麵麩を噛んで軟かにしてゐる間に彼等は時々これを嚙下す。その内にひとりで齒が生えて来て、殆んど氣のつかない間に乳離れをするやうになる。概して百姓の胃は丈夫だが、それはこんな工合にして乳離れをさせるからだ。

子供は生れるとすぐから話しを聞かされる。世間の人は子供が話しを聞きわけることの出来ない内から話しかける。いやそれどころか、子供がまだその話聲を眞似することも出来ない内から出来るやうになるのだ。而かも最初はその聲が大人の耳にと同じやうにはつきりと子供の耳へも聞えるかどうか確かでない。私は乳母が唄を歌つたり、面白い、變化のある音調を出したりして子供を慰めるのは咎めない。だが始終無用な言葉をくどくと言ふことには不賛成だ。子供には調子だけしかわからないのだから。子供には最初は極く僅かの、發音のやさしい、明瞭な言葉を

幾度も繰り返して聞かせるやうにしたい。而かもその言葉は先づ最初子供に見せることの出来る手近かな物に關係のある言葉でなければならぬ。所が不幸にも、吾々が思つてゐるよりも早くから、譯のわからない言葉を使ふことを子供に教へる機會が始まる。學校へ行くと生徒は先生の饒舌を聞かされる、それは丁度襦袢の中で乳母のおしやべりを聞かされるのと同じだ。こんなおしやべりは一切聞かせずに育てるのが最もよい、教育法だと私は思ふ。

言語が如何にしてできたか、又子供等は最初に何んなことを言ふかといふことを研究しようと思ふと、種々の考へが吾々の念頭を襲つて来る。だがいづれにしても子供等はすべて同じ風に話し出す。この場合十分な哲學的思辨が此の上なく有用である。

先づ子供は、彼等の年齢に特有の文法とも言ふべきものをもつてゐる。そしてその句法は大人の文法よりも遙かに一般的である。よく注意して見ると、諸君は子供が如何に正確に或る類推法に従ふかに驚かされるであらう。尤も、それは間違つて居ると言へば言へるが、非常に規則正しいものだ。それは唯だぎこちないのと、習慣に合つて居ないとのために聞きづらいだけである。

ついでこの間私は或る子供が *Mon pere, irai-je-y?* (父さん私はそこへ行かぬか?) と言つたために可哀さうにひどく父親に叱言をいはれて居るのを聞いた。だがこの子供は大人の文法學者よりも彼は正確に類推法に従つて居ることがわかる。何となれば、大人は子供に向つて *Viens-y* と言ひながら何故 *Irai-je-y?* とは言はないのか? その上、子供が *Irai-je-y* とか *Viens-y* とか言はないで如何に巧に母音の運綴を避けて居るかを注意して見るがよい。吾々が此の際、*Viens-y* と言ふ指示副詞を何うしていゝかわからなかつたものだから、仕方なしにこの文句からこの副詞を抜いてしまつたからと言つて、これをつけたのがこの可哀さうな子供の過失だと言へようか? 子供が習慣にそ

むいた少しばかりの過失をしたからと言つてむきになつてこれを直さうとするのは餘りに目苦ししい物識り振り方であり、且つ要らぬ、おせつかいである。何故かと言へば、子供は時が來れば立派に自分で直すからだ。子供の前では常に正確に話をするがよい。子供が誰と居るよりも諸君と一緒に居るのが愉快であるやうにせよ。そして諸君が自分で直してやらなくても諸君の言葉を手本にして知らず知らずの内に子供の言葉が正しくなるやうにせよ。

しかしそれよりもつと肝腎で、しかもこれに劣らず豫防することの困難な悪い癖がある。それは子供が獨りでは話しが出来るやうにならぬがと心配でもするやうに、餘りに多く子供に話させ過ぎることだ。こんな分別の無いことをやると、まるで所期と反對の結果が生ずる。即ち彼等は話すことを覚えるのが遅れ、且つ話が不明瞭になる。子供の言ふことに一から十まで餘り極端に注意すると、子供は明晰に物を言ふ必要が無くなつてしまつて、殆んど口を開くこともないために多くの子供は一生涯悪い發音が抜けず、言葉が不明瞭になつて殆んどわからなくなつて終ふ。

私は長い間百姓達の中にまじつて暮して居たが、いぞ舌纏れをして物を言ふ人に會つたことはない。男も女も女の兒も男の兒も一人だつて舌纏れなどしなかつた。それは何故だらうか? 百姓の聲帯は吾々の聲帯とは構造が異ふのだらうか? そんな筈はない、唯だその使ひ方が違ふだけである。私の部屋の窓のすぐ前に丘があつて、その上で土地の子供等が集つて遊んでゐる。その子供等と私との間は可なり隔つてゐるけれども、私には彼等の言ふことがはつきり判る。そしてそれから此の書物の有益な材料を獲たことが屢々である。毎日私は彼等の聲を聞いて彼等の年齢を誤つた。耳で聞く時は十歳位の子供の聲のやうだが、目で視ると、丈の高さといひ、顔の造

作といひ、せいぜい三つか四つの子供である。此の経験は私ばかりではなかつた。町から私に會ひに來た人達にきいて見ると皆私と同様の誤謬に陥つたのである。

これは何故かと言ふと、町の子供は五六歳になるまでは、室内で乳母にお守りされて育てられる爲めに、囁く位の聲を出せば人が聞いて呉れるからだ。子供が唇を動かすと人は大騒ぎしてその意味を聴きとつて呉れるからだ。町の子供は大人からある言葉を教はるとそれを覺束なく眞似る。すると、始終その傍についてゐる大人は非常な注意を拂つて、子供の言ふ言葉といふよりも寧ろ言はうとする言葉の意味を推量して呉れるからである。

田舎ではこれとはまるでわけが違ふ。百姓女はいつでも子供の傍についてはゐない。そこで子供は母親に聞いて貰ひたいことがあると、是が非でも自分の思つてゐることをはつきりと聲高に言はねばならなくなる。野原にあらばらになつて、父親からも母親からも他の子供からも離れて遊んでゐる子供等は、ひとりで遠くの相手にまで聞えるやうに聲を張り上げる練習をする。これが發音を習得する眞の方法であつて、一生懸命に傍に注意してゐる乳母の耳の中へ、僅かばかりの母音を吃りながら注ぎこんだつて、少しも發音の練習になぞならない。こんな譯だから、百姓の子供は他人から何か訊ねられると、羞かしがつて返事をしないかも知れない。しかし返事をするとなるとはつきりする。これに反して都會の子供には乳母の通譯が要る。乳母がゐなければ、都會の子供が口の中でぶつぶつ言つたとて誰にも聴き取れはしないのだ(註二三)。

(註二三) これには例外がない譯でもない。そして初めの内はよく聴きとれないやうな聲で話す子供が、大聲を出し初ると此上なくうるさい程お喋舌になることが屢々ある。しかしこんな細かいことを一々述べてゐると際限がなくなる。賢明な讀者諸君は、同一觀察から生じた過と不足とは双方とも私の教育法によつて矯正されることを了解せらるゝに相違ない。

い。私は「常に十分なれ」といふ金言と「決して度を過す勿れ」といふ金言とは難すことが出来ないものだと思へる。第一を十分に守れば自然と第二がこれに伴つて來るものである。

男の兒は成長すると此の惡癖を學校で矯正され、女の兒は修道院で矯正されねばならぬ筈である。實際學校や修道院へ行つた子供は父母の家庭ばかりで成長した子供より言葉がはつきりしてゐることは事實である。けれども彼等は澤山の事柄を暗記しなければならず、教師から教はつたことを大きな聲で暗誦しなければならぬから、百姓の子供のやうに明晰な發音を習得することは出来ない。何となれば習つてゐる間に吃る癖がつき、ぞんざいな不正な發音をする癖がついて來る。暗誦をする時は此の弊害は更に甚しい。彼等は一生懸命に言葉を思ひ出さうとする、片語を長くひつぱつて廻る。舌がまはらないのは言葉が思ひ出せないからなのだ。かうして彼等は悪い發音をおぼえ、或は悪い發音をそのままにして置く。私のエミールはこんな風にはならない、少くも以上にあげた理由からはこんな風にならないことを、讀者は後になつて了解されるだらう。私は、下層社會の人々や田舎の人々がこれとは正反對の極端に陥つて、必要のない時でも常に大きな聲で話し、餘りにはつきりと發音するので、聲が強く、亂暴になり、抑揚があまりに甚しくなり、不作法な言葉使ひをするやうになる等のことは認める。

しかしながら、先づ第一に此の方の極端は前に述べた極端よりも悪くないやうに私には思はれる。何となれば、談話の第一の眼目は自分の言ふことを相手に了解させることであるから、談話に就いての最大の缺點は自分の言ふことが相手に理解出來ないことである。談話に抑揚の無いことを自慢するのは、語句の美と力を取り去ることを自慢するやうなものである。抑揚は談話の神髓である。これが談話に情味と眞實味とを與へるのだ。抑揚には言葉程の偽りが無い。上流の人

人が抑揚を非常に恐れるのは恐らくその爲めだらう。何でもかでも同じ調子で言ふ習慣から、人に氣づかれぬ人を愚弄する習慣が生れるのである。こんな風に抑揚を排斥する所から、滑稽な、氣障な、時々の流行に従つた發音法が生じて來るので、これは特に宮中の若い役人仲間達に多い。一體フランス人は言葉や態度をあまり様子振るから他國の人に排斥され、嫌はれるのだ。フランス人は言葉に抑揚をつける代りに、容姿に抑揚をつける。これは人に好かれる所以ではない。

言語に關する此等の小さい缺點を子供に感染させることを世人は非常に心配するけれども、こんなことは少しも心配するに當らない。これを豫防し、これを矯正するのは極めて容易である。しかしながら、聞き取れないやうな、曖昧な、臆病な言葉で話させたり、始終彼等の言葉の調子に小言を言つたり、彼等の言葉使ひを喧ましく言つたりした爲めに附いた子供の癖は決して直らない。いつも婦人室の内ばかりで話して居る人は、軍隊の先頭にたつて號令をしても部下の兵卒にはわからない。況んや喧々囂々たる群衆に向つて語るときなど少しも聞き取れない。子供には先づ第一に男に向つて話させるやうにしなければならぬ。さうすれば子供は必要の時には女にでも立派に話す事が出来るものだ。

質素な飾氣のない田舎で子供を育てよ。さうすれば諸君の子供達の聲ははつきりと澄み渡つてきて、都會の子供達のやうに、口の中でぶつぶつ呟くやうな癖もつかず、又田舎の人の言葉や調子にもかぶれないだらう。たとひ田舎の人の言葉癖を覚えても、これは容易に消えてしまふ。諸君の子供達は生れると直ぐから傍に毎日々々教師がつき切りについてゐて、百姓の言葉使ひに染まぬやうに、或は一旦染みてもこれを消すやうに匡正して呉れるからだ。エミールは私が話す

ことの出来る限りの最も純粹なフランス語を話すだらう。しかし彼は私よりも遙に明瞭に話し、正確に發音するだらう。

話しをしようと試みる子供には、その子供にわかる言葉だけしか聞かせてはならぬ。又その子供が明瞭に發音することの出来る言葉しか言はせてはならぬ。さうすれば子供は同じ片語シラブルを何回となく繰り返して、まるでそれを明瞭に發音する練習でもするかのやうになる。若し子供が吃つて不明瞭なことを言ひ出したら、こちらから骨を折つて意味をきくとつてやらうとしないがよい。子供にいつでも聞いて貰へると期待させると、子供は我儘になるから、こんな習慣をつけさせてはならぬ。諸君は必要なことだけに十分心を配つてゐるに止め、子供が必要でないことを諸君に聞いて貰ひたいと思へば子供の方で努力せねばならぬやうに仕向けるがよい。又子供に、一刻も速かに話すことを覚えさせようと急いではならぬ。子供は話す必要を感じて來ればひとりて立派に話すやうになるものだ。

遅くまで話しが出来ない子供は、早くから話しをする子供のやうにはつきりと話しが出来ないことは事實である。けれどもこれは遅くまで話をしないからはずきり物が言へないのでなく、その反對に生れつき聲帯に故障があつてはつきり物が言へないから遅くまで話しができないのである。何となれば、若しさうでないとしたら、彼等は何故に他の子供より遅くまで話しができないのであるか？ 彼等は他の子供より物を言ふ機會が少いといふのか？ 他の子供のやうに物を言ふやうな刺戟を受けぬとも言ふのか？ 否々、まるでその反對だ。世間の人の子供が遅くまで物を言はないことに氣がつくと、心配して、早く物を言ひ出した子供よりも一層大騒ぎして物を言はせようとする。こんな風に間違つた世話を焼くから、そんなに急がずに放つておけば完全に

物が言へるやうになる子供でも、その爲めに却つてはつきり話しをすることが出来なくなつてしまふのだ。

無理に早くから話しをさせられる子供は、正確な發音を學ぶ暇も有たなければ、自分で話す言葉の意味をよく理解する暇も有たない。ところが自由に放任しておかれた子供は、先づ容易に發音の出来る片語をひとり練習し、ついで、これに少しづつ意味を附け加へてゆく。此の意味を彼等は身振で人に説明する。子供は諸君に言葉を教はるより前に先づ諸君に彼等の言葉を教へる。かういふ次第で彼等は意味がわかるまでは諸君の言葉を知らないのである。彼等に諸君の言葉を早く使はせようとして急がせなければ、彼等はその言葉の意味を注意深く觀察し、十分その意味を確めた後、それを使ふやうになるのである。

幼い子供に早くから話しをさせようとすることから生ずる最も大きな弊害は、子供が最初に人から聞いた話、並びに子供が最初話す言葉が、子供にとつて何等の意味をもつてゐないばかりでなく、彼等はその言葉に吾々とは別の意味を附してゐるので、吾々が子供の言ふことを聞いてもその意味がさつぱりわからないといふことである。それだから子供が非常に正確に返事をしたやうに見えても、彼等は吾々の言ふことがわからずに話してゐるので、吾々にも亦彼等の言ふことがわからないのである。吾々が時々子供の言ふことに驚かされるのは、此のやうな意味の曖昧から起るので、實際は、子供の方では少しも意味を知らずに言つた言葉を、吾々の方で勝手に解釋してゐるから驚かされるのである。此の様に吾々の方で子供の言ふ言葉の眞の意味が何であるかに注意を拂はぬところから、子供が最初誤つた考へを抱き、それが匡正されてから後も尙ほ彼等の一生を通じてその精神の發達過程に影響するのであると私は思ふ。このことは後に實例によつ

て説明する機會が屢々あるだらう。

それ故に子供の使ふ語彙は出来るだけ数を少くするがよい。觀念よりも多くの單語を知つてゐるといふことは甚だいけない。考へることの出来ない事柄を口で言ふことが出来るといふことは甚だいけない。百姓が都會の人よりも概して正確な思想をもつてゐるのは、彼等の語彙が狭いからだと思ふ。彼等は言葉数は少ししか知らないけれども、その意味を正確に比較考量するからだと思ふ。

子供の初期の發育は各方面に於いて殆んど同時に起る。子供は、話すことも、食ふことも、歩くことも殆んど時を同うして覺えて來る。この時が正しく子供の生活の第一期である。此の時までは、子供は母親の胎内にゐた時と少しも變りはない。感情もたなければ、觀念もたず、感覺さへもつてゐるかどうか覺束ない位だ。彼自身が生きてゐることさへも意識してゐないのだ。

Vivit, et est vitæ nescius ipse suae. (彼は生きてゐる、しかし彼は自分が生きてゐることを知らない。)

(Ovid, *Trist.*, eleg 3, Lib. 1.)

8199

昭和三年十二月十五日
昭和二年九月廿五日

第一刷發行
第十七刷發行

エミール 第一篇

定價拾五圓



譯者 平林初之輔

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

印刷者 東京都新宿區市谷加賀町二丁目二番地 孟坂

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

岩波書店

會員番號A一〇九〇〇四號

配給元

東京都千代田區
神田波路町二ノ九

日本出版配給株式會社

讀書子に寄す

岩波茂雄

—岩波文庫發刊に際して—

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に欲度の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、従來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必須すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外親を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し従來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのらるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

終

